



くものいと

KU MO NO I TO

No. 50

関西クモ研究会

March 2017

くものいと No. 50

March 2017

目次

ハエトリグモの相撲：フンチとホンチ	関根幹夫	1
京都新記録のクモ2種	吉田 真	5
ヒトエグモ採集の記録	吉田 真	5
山門水源の森のクモ類3	吉田 真・熊田憲一・西川喜朗・黒田あき	6
キジロオヒキグモの網にトビジロイソウロウグモ	関根幹夫	14
岡山県の鏡野町で確認したクモ	関根幹夫	15
近畿大学奈良キャンパスにおけるカトウツケオグモの採集記録	関根幹夫	16
ベランダに造網していたセアカゴケグモ	上村友久	17
滋賀・京都のクモ類(2011)	吉田 真	19
日本蜘蛛学会訪問記	長崎緑子	27
茨木市で採集したキシノウエトタテグモ	上村友久	29
アシフトハエトリの飼育報告	榎元智子	30
セミのぬけがらを利用するヤガタアリグモ	桂孝次郎	32
高次元球の表面積や体積の求め方	山田廣士	34
クモ網を採集するためのテクニック	船曳和代	35
セアカゴケグモの咬傷例	西川喜朗	44
大阪市立大学理学部附属植物園のクモ(追加)	西川喜朗・赤松史憲	45
クモの観察会用のプリント	西川喜朗	46
京都府京都市におけるヒトエグモの生息分布調査	藤野義人	48
滋賀県におけるヒトエグモ発見と新聞等を通じた市民からの情報収集	河瀬直幹	52
妄想蜘蛛図鑑	Kzoo	56
関西クモ研究会採集会の記録(2016年度)		57
関西クモ研究会2016年度例会の記録		59
関西クモ研究会2015年度会計報告		60

くものいと 第50号

2017年3月29日発行

関西クモ研究会

事務局：567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室

会長：田中 穂積

庶務幹事：山野 忠清

会計幹事：吉田 真

編集幹事：加村 隆英

顧問：西川 喜朗・船曳 和代

会計監査：関根 幹夫

ハエトリグモの相撲：フンチとホンチ

関根 幹夫

Fighting of jumping spiders known as 'Funchi' and 'Honchi'

Mikio Sekine

This is a report on the annual spider-fighting competition in Futsu City, Chiba Prefecture, which was held on May 4, 2015 (Figs. 1–2). A similar event was held on May 3, 2016 in Yokohama City, Kanagawa Prefecture (Figs. 3–4). Two males of jumping spiders will readily fight each other like sumo wrestlers. They are known as 'Funchi' and 'Honchi', a regional dialect, in Futsu and Yokohama, respectively. The scientific name of the fighting spider is *Carrhotus xanthogramma* (Latreille 1819). This species is 7–8 mm in body length, and inhabits grasses and low shrubs. Both children and adults have searched for stronger spiders for the event.

千葉県富津市と神奈川県横浜市では、2匹のハエトリグモを闘わせる遊び（以下本稿では、ハエトリグモ相撲と呼ぶ）が、有志により伝承され、毎年5月のゴールデンウィークに大会が開催されている。今回、富津市と横浜市のハエトリグモ相撲大会取材する機会を得たので、ここに紹介する。富津市と横浜市のハエトリグモ相撲で使用されるクモは、草の葉上や低灌木に生息する体長7–8 mmのネコハエトリ *Carrhotus xanthogramma* (Latreille 1819) のオス成体である（新海2006）。富津市では、ネコハエトリのオス成体のことを「フンチ」と呼び、横浜市では「ホンチ」と呼んでいる。なお、房総半島にはフンチの他、カンキ、カネコ、ゴット、ホントなど多くの方言名がある（川名1985）。

2匹のクモをどのように闘わせるのだろうか。富津市と横浜市のハエトリグモ相撲大会を報告するに先立ち、かつての横浜での様子を、池田（1989）より引用し以下に紹介する。

春3月、子どもたちは、ネコハエトリの垂成体（「パパ」と呼ばれる）を帽子に採り、これをホンチ箱という小箱に入れ、ふところであたためる。脱皮して成体オスとなったホンチを持ち寄った子どもたちは、マッチの空き箱の中に2匹のホンチを入れ、ガラス片でふたをする。すると、2匹のホンチは、「剣」（第1脚）を振り上げ、剣先をたたき合って相手を押しまくろうとする。両者の力が接近しているときには、2匹が剣を降ろして四つに組むこともあり、この体勢は「地取り」と呼ばれる。「地取り」が終わり、再度、剣をのぼして押し合い、片方が逃げると、勝負がつく。一度負けたクモは、負けぐせがつくので、子どもたちは負けたクモを野に還した。

なお、かつての富津を含む房総半島でのハエトリグモ相撲については、上記内容と重複する部分も多いことから、本稿ではこれを紹介することを省くが、房総の漁師が漁の合間にフンチで遊ぶ様子を活写した報文がある（白土1988）。

さらに、斎藤（1985）は、ネコハエトリの行動研究に基づき、ネコハエトリのオスどうしの威嚇誇示行動を次の7段階に分けた。すなわち、

- ①注視期：視界に相手を認め、闘いの意志決定をする。
- ②前進期：剣（第1脚）を振り上げ、交互上下運動しながら相手に接近する（図4参照）。
- ③差し手争い期：剣の先端を互いにあわせ、上顎がむきだしに開き、腹部のリズミカルな上下運動をしばしば伴う。
- ④四つ組み期：③で差し手争いとなり、両上手を制した側が有利な態勢となる。
- ⑤地取り期：両者の力が伯仲しているとき、④からさらに進んで「地取り」となる。剣を降ろし四つ組み状態のまま互いに押しつ押しされながら、剣の相互組みかえをし、静かではあるが闘志を感じさせる行動をとる。場所の移動はあまりなく、もしくは徐々に移動する（図2参照）。
- ⑥第二次差し手争い期：凄絶なつばぜりあい。③と同様の差し手争いとなりつつ、時に上顎が噛みあい、腹部の上下運動も激しさを加える。
- ⑦決着期：差し手争いが再び決まり、深く四つに組みあい、上手を制した側は相手の腹部背面を剣の先端で引っかく。これによって、引っかかれた側はたまらず逃げ出す。



図 1. 富津のフンチ (2015 年). 厚紙をかざし, 土俵のクモを強い陽射しから護っている.

Fig. 1. The 'Funchi' spider-fighting in Futtsu City, Chiba Prefecture in 2015. Using a thick piece of cardboard, a man protects spiders, which are in the sumo ring, from the beating sun.

なお, すべての争いが最後まで進むとは限らず, それぞれの段階ごとに, そこまでの段階でやめることもあると報告されている.

さて, 富津市の「日本三大くも合戦・第 17 代横綱決定戦」は, 富津フンチ愛好会により 2015 年 5 月 4 日, 富津市富津の八坂神社境内で開催された. 大会参加者は 90 名, 1,000 人を超す観衆が八坂神社境内に集まった. 大会は, 一般参加の部と子どもの部に分けて行われた. 大会スケジュールは, 9 時から受付開始, 開会式の後, 10 時から 12 時まで一般予選, 昼食休憩の後, 13 時から 15 時 30 分までは横綱決定戦であった. 一般参加者トーナメント戦 (一般予選) からは上位 3 人 (匹) が, 決勝トーナメント (横綱決定戦) へと進んだ. 富津フンチ愛好会は, 世代別に 3 グループあり, ベテランの「森グループ」, 中堅の「内房富津フンチ倶楽部」と若手の「闘蜘蛛会 (とうちかい)」から構成されている. 20 代から 80 代までの 60 名ほどが, 互いに競い合っている. 会員による予選会は, 大会前日の 5 月 3 日に行われた. グループごとに上位各 3 人が大会当日の横綱決定戦に出場し, 一般の上位 3 人を加えた 12 人で決勝トーナメントが行われた. 予選会は, 会員選りすぐりのクモで行われることから, 大会よりも熱の入った試合になるという. 大会は, 八坂神社の境内に一畳の畳を敷き, この畳の上に置いた約 40 cm 四方の台上で行われた (図 1-2). 以前は, 会員どうしが自慢のクモを闘わせていたが, 2010 年の大会からは, 一般参加者を募集している. また, 小学校でのデモンストレーションを行うなど, 若手の「闘蜘蛛会」が広報・普及活動の担い手として, この地のハエトリグモ相撲を盛り上げている. 2010 年から富津市富津の埋立記念館に, フンチの歴史が展示された. このように, 富津市では伝承と同時に新たな試みがされている. 30 代の若手を中心とした「闘蜘蛛会」のパワーは, 今後の発展を予感させるに十分であった. なお, 大会名に冠した「日本三大くも合戦」とは, 富津フンチ愛好会広報担当の小坂和幸氏によると, ネコハエトリ, コガネグモとジョロウグモによる「くも合戦」の意であるという. 念のために記せば, ここでいうジョロウグモは, 標準和名のジョロウグモではなく, コガネグモの方言名である.

一方, 横浜市の「2016 年横浜ホンチトーナメント大会」は, 横浜ホンチ保存会により 2016 年 5 月 3 日, 横浜市金沢区の金沢自然公園で開催された. 大人の部に 43 名が参加し, 子どもの部は 20 名の参加であった. 大会当日の 10 時から金沢自然公園内で, ホンチ教室が開催された. これは, 横浜ホンチ保存会が子どもたちのホンチ採集を手伝い, 遊び方を教える催しである. 大会は, 公園内に設置されている 2 カ所の丸いテーブル (14-15 人掛) を囲んで行われた. 大人の部と子ども



図 2. 2匹のオスどうしは、相撲力士のように闘う。
Fig. 2. Two males of jumping spider will readily fight each other like sumo wrestlers.



図 3. ホンチ教室の旗の下に集まった横浜の子どもたち (2016年).
Fig. 3. Children gather under a flag and enjoying the 'Honchi' spider-fighting in Yokohama City, Kanagawa Prefecture in 2016.

の部の 2カ所それぞれで 2名の行司審判により、12時から16時過ぎまで、途中休憩なく進行した(図3-4)。試合は、2枚のバルサ板(10cm×8cm×2mm)にホンチを乗せて闘わせる方法(藤川1991)で行われていた。大人の部の準決勝で6分間も闘ったホンチは、決勝でも4分を超す大勝負をものにした。その見応えのある闘いに、観衆から万雷の拍手が巻き起こった。横浜ホンチ保存会は、1983年5月3日に横浜に伝わるホンチ遊びの伝承を目的に設立されたホンチ好きの有志の会で、現在の会員数は33名である。子どものためのホンチ教室を開催するなど、普及に努めている。横浜市の大会の翌日開催される富津市の大会にも、連日で参加する熱心な保存会会員もいることから、横浜市と富津市の交流の進展が期待できる。

なお、富津市では、茶の木にいるクモが大きくて強いという聞き取りをした。また、横浜市では参加者からの聞き取りにより、「バラボン」（ノイバラにいるホンチ）が最も強く、「ササボン」（笹にいるホンチ）は2番目に強い。「剣を研ぐ」（第1脚を第2脚にこすりつける動作のこと）ホンチは強い。さらに、マミジロハエトリのオス（「カンタ」と呼ばれる）について、この種はホンチをたおす毒グモであるという奇妙ないい伝えが現在にまで伝承されていることを確認した。これは、ホンチ遊びが盛んに行われていた昭和20年代から30年代に、横浜の子どもたちの間で言い伝えられていたものである（斎藤 1984）。なお、クモに闘う意欲がみられない場合は、富津市と横浜市ともに、ネコハエトリのメスをオスに見せていた。この工夫も、ハエトリグモ相撲が盛んに行われていた頃から伝わる方法であり、メスを見たオスどうしが果敢に闘うようになるから大変に興味深い。ハエトリグモ相撲の愛好家たちは、富津市と横浜市ともに、年に一度の大会に向け、夢中になって強いクモを探している。数日前からクモを採り、ハエを餌として与え、準備をして大会に臨んでいるとのことであった。



図 4. ホンチ（ネコハエトリのオス）どうしの闘い（横浜市）。

Fig. 4. Male-to-male fray of the 'Honchi', *Carrhotus xanthogramma*, in Yokohama.

引用文献

- 池田博明 1989. クモ合戦. Pp. 195–202. In: 梅谷献二・加藤輝代子（編著），クモの話Ⅱ. 技報堂出版（東京），239 pp.
- 川名 興 1985. ネコハエトリ喧嘩民俗の宝庫・房総半島. Pp. 45–91. In: 川名 興・斎藤慎一郎，クモの合戦 一虫の民俗誌一. 未来社（東京），238 pp.
- 前川隆敏 1991. ネコハエトリのクモ合戦のさせ方. *Atypus*, 98/99: 43–46.
- 斎藤慎一郎 1984. クモ合戦の文化論—伝承遊びから自然科学へ. 大日本図書 大日本ジュニア・ノンフィクション（東京），164 pp.
- 斎藤慎一郎 1985. ネコハエトリの習性と生活史. Pp. 104–125. In: 川名 興・斎藤慎一郎，クモの合戦 一虫の民俗誌一. 未来社（東京），238 pp.
- 新海栄一 2006. 日本のクモ. 文一総合出版（東京），335pp.
- 白土三平 1988. クモ合戦. Pp. 44–47. In: 白土三平，白土三平フィールド・ノート②風の味. 小学館（東京），111 pp.

京都新記録のクモ 2 種

吉 田 真

京都新記録のクモ 2 種, シロホシヒメグモとキヌアミグモ, を採集したので報告する.

シロホシヒメグモ *Steatoda grossa* (ヒメグモ科)

2012年2月19日に, 京都市左京区修学院坪江町の我が家でシロホシヒメグモのオス成体1頭を採集した. また, 2016年5月20日に我が家で再び, シロホシヒメグモのメス成体1頭を採集した. 新海栄一(2006)によると, このクモは屋内性の不規則網を張るクモで, 近年の外来種である. 海岸付近に多いという. 新海明ら(2014)によると, このクモは近畿では大阪府と兵庫県で採集されているが, 京都府では初記録である.

キヌアミグモ *Cyrtophora exanthematica* (コガネグモ科)

2016年5月18日に, 自宅から100mほど離れた京都市左京区修学院南代町の民家の生垣で, キヌアミグモ多数を発見した. コウヤマキの生垣には多数のクサグモの幼体の網が張られており, 網の写真を撮っていたところ, 同じくらいの大ささの見慣れない網を見つけた. 網がメッシュになっている! 「スズミグモだ」と思ったが, クモ本体が見当たらなかった.

網に枯葉がかかっているのので, この中にクモがいるのかと思い, ピンセットでつついてみたところ, 何とその「枯葉」が動いたのである! これは, 昔々, 和歌山の故・東條先生に教えてもらったキヌアミグモであると, 初めて分かった. よく見ると, この生垣に数十個の網があった. 近くの民家の生垣も探してみたが, キヌアミグモの網はここ以外では全く見られなかった.

新海明ら(2014)によると, このクモはおおむね, 静岡県以西の太平洋沿岸の県に生息しているが, 海を持たない奈良県でも記録がある. 京都府では初記録である. まさか京都に生息しているとは思わなかった!

引用文献

新海栄一 2006. ネイチャーガイド 日本のクモ. 文一総合出版, 335 pp, 東京.

新海明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生 2014. CD 日本のクモ Ver. 2014.



ヒトエグモ採集の記録

吉 田 真

京都府の自然環境保全課から問い合わせがあった. レッドデータブックの情報提供フォームに住民からヒトエグモの情報提供があったので, 添付の画像がヒトエグモかどうか知りたいという. 吉田が確認したところ, まさしくヒトエグモであった.

2016年7月1日に, 京都市伏見区深草の民家の台所にいたという.

山門水源の森のクモ類3

吉田 真・熊田 憲一・西川 喜朗・黒田 あき

はじめに

山門水源の森では、2011年の7月と10-11月の2回にわたってクモ類を採集してきた。その結果はくものいと46号と47号に掲載されている(吉田ら2012, 2013)。今回は、2012年6月に行なわれた調査の結果を報告する。

「山門水源の森を次世代に引き継ぐ会」の皆さんには、この森では原則的に禁止されている採集を許可していただき、調査場所の案内だけでなく、クモ類の採集もしていただいた。さらに伊藤博さんには、調査場所の地図の作成やGPSによる緯度・経度・標高の測定などをしていただいた。会の皆さんのご厚意に深く感謝するものである。

またクモの同定については、井原庸さんと谷川明男さんからさまざまなご教示を受けた。厚く御礼申し上げる。

調査地と方法

おもに、ビーティングとシフティングで採集したが、見つけ取りによる採集も行った。以下の場所で採集を行った(図1)。

1. 沢 (N35°33'21" E136°07'30"~N35°33'22" E136°07'28", 標高 230 m~280 m)
2. 湿地~ブナの森 (N35°33'14" E136°07'08"~N35°33'28" E136°06'47", 標高 280 m~500 m)
3. 守護岩周辺 (N35°33'32" E136°06'43", 標高 520 m)
4. 守護岩~アカガシの森 (N35°33'32" E136°06'43"~N35°33'34" E136°07'10", 標高 520 m~330 m)
5. 四季の森 (N35°33'28" E136°07'05", 標高 315 m)
6. 湿原 (N35°33'27" E136°07'13"~35°33'14" E136°07'08", 標高 290 m)
7. 駐車場~楽舎 (N35°33'17" E136°07'36"~N35°33'21" E136°07'31", 標高 205 m)

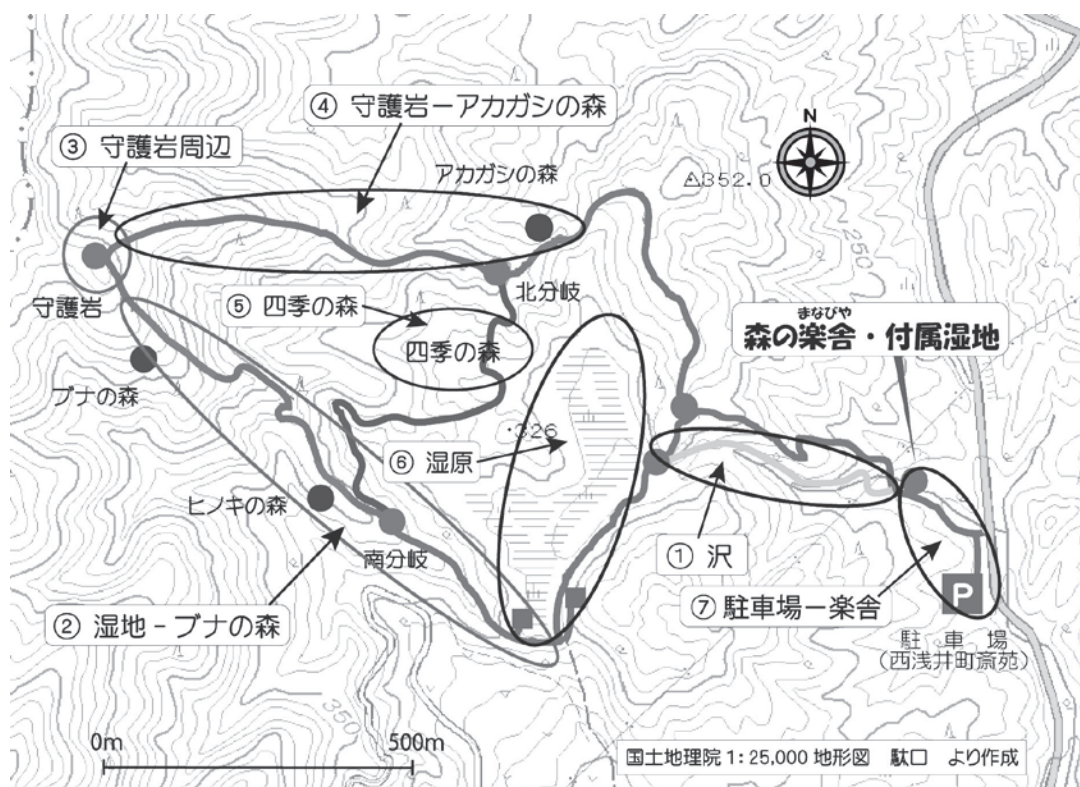


図1. 山門水源の森の調査地.

表 1. 採集された科と種数.

科	種数	不明種数	成体不明種	科	種数	不明種数	成体不明種
タマゴグモ科	1	0	0	アシナガグモ科	9	0	0
ハグモ科	1	0	0	コガネグモ科	16	0	0
ナミハグモ科	1	1	1	コマチグモ科	1	0	0
ハタケグモ科	1	0	0	シボグモ科	1	0	0
ヤチグモ科	1	0	0	エビグモ科	3	0	0
タナグモ科	2	0	0	ワシグモ科	5	0	0
キシダグモ科	3	0	0	カニグモ科	5	0	0
コモリグモ科	7	1	1	フクログモ科	2	1	1
センショウグモ科	1	0	0	イツツグモ科	1	0	0
サラグモ科	14	1	1	ネコグモ科	1	0	0
ヒメグモ科	23	0	0	ハエトリグモ科	11	0	0
カラカラグモ科	2	0	0	合計	112	4	4

結果と考察

今回の調査では 23 科 112 種が採集された (表 1). このうち, 種レベルまで同定できたものが 107 種, 同定できなかったものが 4 種であった. 同定できなかった 4 種すべては成体であり, 未記載種または日本新記録種の可能性がある. 種数が多かった科は, ヒメグモ科 (23 種), コガネグモ科 (16 種), サラグモ科 (14 種), ハエトリグモ科 (11 種) などであった.

表 2 に採集されたクモのリストを示す. ☆の 4 種は成体でありながら同定できなかったものである. また, *で示した種は, 吉田ら (2012a), 吉田ら (2012b), 吉田ら (2014), 新海ら (2014) のリストに載っていない滋賀県新記録種である. 新記録種は, ムツメカレハグモ *Lathys sexoculata* (ハグモ科), クロササヒメグモ *Okumaella okumae*, ハラダカツクネグモ *Phoroncidia altiventris* (ヒメグモ科), シバサラグモ *Nerienne herbosa*, ハシグロナンキングモ *Neserigone nigriterminorum*, ヤガスリサラグモ *Nerienne albolimbata* (サラグモ科), ヤマトコマチグモ *Chiracanthium lascivum* (コマチグモ科), ヤガタハエトリ *Pseudeuophrys erratica* (ハエトリグモ科) の 9 種であった.

表 2. 採集されたクモのリスト. ☆は未記載種または日本新記録種の可能性がある種. *は滋賀県新記録種.

タマゴグモ科 (1 種)	コクサグモ	☆ <i>Trochosa</i> sp.
ダニグモ	キシダグモ科 (3 種)	センショウグモ科 (1 種)
ハグモ科 (1 種)	アオグロハシリグモ	センショウグモ
*ムツメカレハグモ	アズマキシダグモ	サラグモ科 (14 種)
ナミハグモ科 (1 種)	イオウイロハシリグモ	アシナガサラグモ
☆ヨシアキナミハグモ近縁種	コモリグモ科 (7 種)	アトグロアカムネグモ
ハタケグモ科 (1 種)	イナダハリゲコモリグモ	コアカサナダグモ
ハタケグモ	ウヅキコモリグモ	サイトウヌカグモ
ヤチグモ科 (1 種)	クラークコモリグモ	ザラアカムネグモ
ヨゴヤマヤチグモ	クロココモリグモ	*シバサラグモ
タナグモ科 (2 種)	ハリゲコモリグモ	シロブチサラグモ
クサグモ	ヤマハリゲコモリグモ	ナラヌカグモ

*ハシグロナンキングモ	アシナガグモ科 (9種)	キハダエビグモ
*ヒメヨツボシサラグモ	アシナガグモ	シャコグモ
ムネグロサラグモ	ウロコアシナガグモ	ワシグモ科 (5種)
*ヤガスリサラグモ	エゾアシナガグモ	エビチャヨリメケムリグモ
ユノハマサラグモ	オオシロカネグモ	フタホシテオノグモ
☆サラグモ科の一種	コシロカネグモ	マエトビケムリグモ
ヒメグモ科 (23種)	シナノアシナガグモ	メキリグモ
アシプトヒメグモ	タニマノドヨウグモ	ヤマヨリメケムリグモ
アマミミジグモ	メガネドヨウグモ	カニグモ科 (5種)
オナガグモ	ヤマジドヨウグモ	アマギエビスグモ
カグヤヒメグモ	コガネグモ科 (16種)	コハナグモ
カニミジグモ	アオオニグモ	セマルトラフカニグモ
カレハヒメグモ	オオクマヤミイロオニグモ	ヤミイロカニグモ
*クロササヒメグモ	オニグモ	ワカバグモ
コアカクロミジグモ	カラオニグモ	フクログモ科 (2種)
コケヒメグモ	カラフトオニグモ	ヤギヌマフクログモ
コンピラヒメグモ	ギンナガゴミグモ	☆ <i>Clubiona</i> sp.
シモフリヒメグモ	クマダギンナガゴミグモ	イツツグモ科 (1種)
タカユヒメグモ	コガタコガネグモ	イツツグモ
ツリガネヒメグモ	コゲチャオニグモ	ネコグモ科 (1種)
バラギヒメグモ	サツマノミダマン	キレオビウラシマグモ
*ハラダカツクネグモ	シロスジショウジョウグモ	ハエトリグモ科 (11種)
ハラナガヒシガタグモ	トゲグモ	アオオビハエトリ
ヒシガタグモ	ドヨウオニグモ	アメイロハエトリ
フタオイソウロウグモ	ハツリグモ	イナズマハエトリ
ボカシミジグモ	ヤマシロオニグモ	ジャバラハエトリ
ホシミドリヒメグモ	ヨツデゴミグモ	シラホシコゲチャハエトリ
ムナボシヒメグモ	コマチグモ科 (1種)	デーニッツハエトリ
ヤマトミジグモ	*ヤマトコマチグモ	マガネアサヒハエトリ
ヤリグモ	シボグモ科 (1種)	マミジロハエトリ
カラカラグモ科 (2種)	シボグモ	*ヤガタハエトリ
カラカラグモ	エビグモ科 (3種)	ヤサアリグモ
ヤマジグモ	アサヒエビグモ	ヨダンハエトリ

この森では、2011年7月の調査で21科106種、10-11月の調査では28科144種のクモが採集されている(吉田ら, 2012b, 2013)。これに今回の分を合わせると、種まで同定できたものは31科196種となっている。このほかに、成体であるにもかかわらず同定できなかったものが13種(ナミハグモ科2種, ヤチグモ科3種, タナグモ科1種, コモリグモ科1種, サラグモ科5種, フクログモ科1種)あり、そのうちのいくつかは未記載種と思われる。

引用文献

- 小野展嗣(編著)2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 738 pp, 神奈川.
 新海明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生 2014. CD日本のクモ Ver. 2014.
 著者自刊, CD.
 吉田真・社本吉正・小池直樹・原口岳 2012a. 龍谷の森で採集された滋賀県新記録種. くものいと, 46: 12-14.
 吉田真・熊田憲一・西川喜朗・黒田あき 2012b. 山門水源の森のクモ類. くものいと, 46: 15-22.
 吉田真・熊田憲一・西川喜朗・黒田あき 2014. 山門水源の森のクモ類 2. くものいと, 47: 34-50.

付表. 山門水源の森のクモ類 (2012年6月2日). クモの性別と発育段階を, M: オス成体, F: メス成体, m: オス幼体, y: 幼体で示す. また, 採集者を, Kr: 黒田, Km: 熊田, N: 西川, U: 上田, Y: 吉田, It: 伊藤孝子で示す. 以下のリストでは, 科の配列は小野 (2009) に準じ, 種の配列は学名のアルファベット順で示した.

1. 沢 (N35°33'21" E136°07'30"~N35°33'22" E136°07'28", 標高 230 m~280 m)

ヤチグモ科

ヨゴヤマヤチグモ *Tegeocoelotes yogoensis* f (Km)

タナグモ科

コクサグモ *Allagelena opulenta* y (Km)

キシダグモ科

アオグロハシリグモ *Dolomedes raptor* y (Km)

センショウグモ科

センショウグモ *Ero japonica* F (Km)

サラグモ科

シバサラグモ *Nerienne herbosa* F (Km)

ハシグロナンキングモ *Neserigone nigriterminorum* F (Km)

ヒメヨツボシサラグモ *Strandella quadrimaculata* F (Km)

ユノハマサラグモ *Turinyphia yunohamensis* F (Km)

ヒメグモ科

カニミジグモ *Phycosoma mustelinum* MF (Km)

クロササヒメグモ *Okumaella okumae* m (Km)

コアカクロミジグモ *Yaginumena mutilata* f (Km)

ツリガネヒメグモ *Parasteatoda angulithorax* Mmf (Km)

ハラダカツクネグモ *Phoroncidia altiventris* M (Km)

ハラナガヒシガタグモ *Moneta caudifer* M (Km)

フタオイソウロウグモ *Neospintharus fur* mf (Km)

ムナボシヒメグモ *Platnickina sterninota* Ff (Km)

ヤリグモ *Rhomphaea sagana* F (Km)

カラカラグモ科

カラカラグモ *Theridiosoma epeiroides* m (Km)

ヤマジグモ *Ogulnius pullus* F (Km)

アシナガグモ科

エゾアシナガグモ *Tetragnatha yesoensis* MmF (Km)

コシロカネグモ *Leucauge subblanda* mf (Km)

タニマノドヨウグモ *Metleucauge kompirensis* MFf (Km)

メガネドヨウグモ *Metleucauge yunohamensis* F (Km)

ヤマジドヨウグモ *Meta reticuloides* y (Km)

コガネグモ科

ヨツデゴミグモ *Cyclosa sedeculata* F (Km)

シマゴミグモ *Cyclosa omonaga* F (Kr)

トゲグモ *Gasteracantha kuhli* F (Kr)

イツツグモ科

イツツグモ *Anyphaena pugil* F (Km)

エビグモ科

アサヒエビグモ *Philodromus subaureolus* f (Km)

カニグモ科

ワカバグモ *Oxytate striatipes* F (Km)

フクログモ科

ヤギヌマフクログモ *Clubiona yaginumai* mf (Km)

ハエトリグモ科

アリグモ *Myrmarachne japonica* F (Kr)

アオオビハエトリ *Siler cupreus* F (Km)

アメイロハエトリ *Synagelides agoriformis* F (Km)

ジャバラハエトリ *Helicium yaginumai* MF (Km)

マガネアサヒハエトリ *Phintella arenicolor* MFf (Km)

マミジロハエトリ *Evarcha albaria* M (Km)

ヤサアリグモ *Myrmarachne inermichelis* Mmf (Km)

2. 湿地〜ブナの森 (N35°33'14" E136°07'08"〜N35°33'28" E136°06'47", 標高 280 m〜500 m)

ナミハグモ科	
ヨシアキナミハグモ近縁種 <i>Cybaeus</i> sp.	F (Y)
ヤチグモ科	
Gen sp.	y (Y)
キシダグモ科	
アズマキシダグモ <i>Pisaura lama</i>	F (U)
サラグモ科	
Gen sp.	M (U)
ヒメグモ科	
カニミジングモ <i>Phycosoma mustelinum</i>	m (Y)
シモフリヒメグモ <i>Yunohamella lyrica</i>	F (Y)
カニグモ科	
カニグモ属の一種 <i>Xysticus</i> sp.	y (U)
ハエトリグモ科	
デーニツツハエトリ <i>Plexippoides doenitzi</i>	F (U)
マミジロハエトリ <i>Evarcha albaria</i>	MF (U)

3. 守護岩周辺 (N35°33'32" E136°06'43", 標高 520 m)

ハグモ科	
ムツメカレハグモ <i>Lathys sexoculata</i>	F (Y)
ナミハグモ科	
Gen sp.	y (Y)
ヤチグモ科	
Gen sp.	y (Y)
タナグモ科	
Gen sp.	y (Y)
サラグモ科	
ザラアカムネグモ <i>Asperthorax communis</i>	F (Y)
シロブチサラグモ <i>Prolyniphia radiata</i>	MF (Y)
ヒメヨツボシサラグモ <i>Strandella quadrimaculata</i>	F (Y)
ヤガスリサラグモ <i>Neriere albolicmbata</i>	F (Y)
ヒメグモ科	
カニミジングモ <i>Phycosoma mustelinum</i>	MF (Y)
シモフリヒメグモ <i>Yunohamella lyrica</i>	MF (Y)
タカユヒメグモ <i>Takayus takayensis</i>	Mf (Y)
ツリガネヒメグモ <i>Parasteatoda angulithorax</i>	y (Y)
ヒシガタグモ <i>Episinus affinis</i>	F (Y)
ボカシミジングモ <i>Yainumena castrata</i>	Fy (Y)
ホシミドリヒメグモ <i>Chrysso foliata</i>	y (Y)
コガネグモ科	
Gen sp.	y (Y)
カラフトオニグモ <i>Plebs sachalinensis</i>	F (Y)
シロスジシヨウジョウグモ <i>Hypsosinga sanguinea</i>	F (Y)
シボグモ科	
シボグモ <i>Anahita fauna</i>	y (Y)
エビグモ科	
アサヒエビグモ <i>Philodromus subaureolus</i>	y (Y)
キハダエビグモ <i>Philodromus spinitarsis</i>	F (Y)
ワシグモ科	
ヤマヨリメケムリグモ <i>Drassylus sasakawai</i>	F (Y)
カニグモ科	
カニグモ属の一種 <i>Xysticus</i> sp.	y (Y)
コハナグモ <i>Diaea subdola</i>	y (Y)
フクログモ科	
フクログモ属の一種 <i>Clubiona</i> sp.	y (Y)
ハエトリグモ科	
Gen sp.	y (Y)

ジャバラハエトリ <i>Helicius yaginumai</i>	M (Y)
デーニッツハエトリ <i>Plexippoides doenitzi</i>	M (Y)
マガネアサヒハエトリ <i>Phintella arenicolor</i>	M (Y)
4. 守護岩〜アカガシの森 (N35°33'32" E136°06'43"~N35°33'34" E136°07'10", 標高 520 m~330 m)	
ヤチグモ科	
Gen sp.	y (It)
サラグモ科	
ヤガスリサラグモ <i>Nerienne albolimbata</i>	F (It)
ヒメグモ科	
ツリガネヒメグモ <i>Parasteatoda angulithorax</i>	y (It)
ワシグモ科	
マエトビケムリグモ <i>Sernokorba pallidipatellis</i>	F (It)
ハエトリグモ科	
Gen sp.	y (It)
5. 四季の森 (N35°33'28" E136°07'05", 標高 315 m)	
タマゴグモ科	
ダニグモ <i>Gamasomorpha cataphracta</i>	f (Km)
ヤチグモ科	
ヨゴヤマヤチグモ <i>Tegeocoelotes yogoensis</i>	f (Km)
タナグモ科	
クサグモ <i>Agelena sylvatica</i>	f (Km)
コクサグモ <i>Allagelena opulenta</i>	y (Km)
キシダグモ科	
アオグロハシリグモ <i>Dolomedes raptor</i>	y (Km)
イオウイロハシリグモ <i>Dolomedes sulfureus</i>	y (Km)
コモリグモ科	
クラークコモリグモ <i>Pirata clercki</i>	F (Km)
ハリゲコモリグモ <i>Pardosa laura</i>	MFy (Km, Kr)
ヤマハリゲコモリグモ <i>Pardosa brevivulva</i>	F (Km)
サラグモ科	
アシナガサラグモ <i>Prplinyphia longipedella</i>	f (Km)
コアカサナダグモ <i>Nematogmus rutilus</i>	F (Km)
サイトウヌカグモ <i>Ainerigone saitoi</i>	F (Km)
ナラヌカグモ <i>Parhypomma naraense</i>	F (Km, Kr)
ムネグロサラグモ <i>Nerienne nigripectoris</i>	MF (Km)
ヒメグモ科	
カグヤヒメグモ <i>Parasteatoda culicivora</i>	F (Km)
カニミジグモ <i>Phycosoma mustelinum</i>	MFf (Km)
カレハヒメグモ <i>Enoplognatha abrupta</i>	F (Km)
コケヒメグモ <i>Yumohamela subadulta</i>	F (Km)
コンピラヒメグモ <i>Parasteatoda kompirensis</i>	F (Km)
ツリガネヒメグモ <i>Parasteatoda angulithorax</i>	F (Km)
バラギヒメグモ <i>Takayus chikunii</i>	F (Km)
ヒシガタグモ <i>Episinus affinis</i>	M (Km)
フタオイソウロウグモ <i>Neospintharus fur</i>	f (Km)
ボカシミジグモ <i>Yaginumena castrata</i>	MFf (Km)
ホシミドリヒメグモ <i>Chryso foliate</i>	F (Km)
ムナボシヒメグモ <i>Platnickina sterninotata</i>	F (Km)
ヤマトミジグモ <i>Phycosoma japonicum</i>	f (Km)
カラカラグモ科	
カラカラグモ <i>Theridiosoma epeiroides</i>	M (Kr)
アシナガグモ科	
ウロコアシナガグモ <i>Tetragnatha squamata</i>	MF (Km)
エゾアシナガグモ <i>Tetragnatha yesoensis</i>	MF (Km)
コシロカネグモ <i>Leucauge subblanda</i>	f (Km)

コガネグモ科

アオオニグモ <i>Araneus pentagrammicus</i>	F (Km)
オオクマヤミイロオニグモ <i>Araneus acusisetus</i>	M (Km)
カラオニグモ <i>Araneus tsurusakii</i>	y (Kr)
カラフトオニグモ <i>Plebs sachalinensis</i>	F (Km, Kr)
ギンナガゴミグモ <i>Cyclosa ginnaga</i>	mf (Km)
クマダギンナガゴミグモ <i>Cyclosa kumadai</i>	M (Kr)
サツマノミダマシ <i>Neoscona scylloides</i>	y (Km)
シロスジショウジョウグモ <i>Hypsosinga sanguinea</i>	M (Kr)
トゲグモ <i>Gasteracantha kuhli</i>	y (Km)
ハツリグモ <i>Acuilas coccineus</i>	MF (Km)

シボグモ科

シボグモ <i>Anahita fauna</i>	MFm (Km)
---------------------------	----------

エビグモ科

キハダエビグモ <i>Philodromus spinatarsis</i>	MF (Km, Kr)
シャコグモ <i>Tibellus japonicus</i>	F (Km)

ワシグモ科

エビチャヨリメケムリグモ <i>Drassyllus sanmenensis</i>	MF (Kr)
フタホシテオノグモ <i>Callilepis schuzteri</i>	F (Kr)
メキリグモ <i>Gnaphosa kompirensis</i>	f (Km)
ヤマヨリメケムリグモ <i>Drassylus sasakawai</i>	MF (Km)

カニグモ科

アマギエビスグモ <i>Lysiteles coronatus</i>	F (Km)
コハナグモ <i>Diaea subdola</i>	f (Km)

ネコグモ科

キレオビウラシマグモ <i>Phruroithus coreanus</i>	f (Km)
----------------------------------------	--------

ハエトリグモ科

ジャバラハエトリ <i>Heliciscus yaginumai</i>	m (Km)
デーニツツハエトリ <i>Plexippoides doenitzi</i>	MF (Km)
マミジロハエトリ <i>Evarcha albari</i>	MF (Km, Kr)
ヤガタハエトリ <i>Pseudeuophrys erratica</i>	MF (Km, Kr)
ヨダンハエトリ <i>Marpissa pulla</i>	M (Kr)

6. 湿原 (N35°33'27" E136°07'13"~35°33'14" E136°07'08", 標高 290 m)**タナグモ科**

クサグモ <i>Agelena sylvatica</i>	f (Km)
-------------------------------	--------

コモリグモ科

イナダハリゲコモリグモ <i>Pardosa agraria</i>	Ff (Km)
ウヅキコモリグモ <i>Pardosa astrigera</i>	Mmf (Km)
クロココモリグモ <i>Arctosa subamylacea</i>	F (Km)
ヤマハリゲコモリグモ <i>Pardosa brevivulva</i>	F (Km)

サラグモ科

ムネグロサラグモ <i>Nerienne nigripectoris</i>	F (Km)
----------------------------------------	--------

ヒメグモ科

アシプトヒメグモ <i>Anelosimus crassipes</i>	M (Km)
ボカシミジングモ <i>Yaginumena castrata</i>	mf (Km)

アシナガグモ科

アシナガグモ <i>Tetragnatha praedonia</i>	Ff (Km)
エゾアシナガグモ <i>Tetragnatha yesoensis</i>	MFm (Km)
メガネドヨウグモ <i>Metleucauge yunohamensis</i>	F (Km)

コガネグモ科

オニグモ <i>Araneus ventricosus</i>	y (Km)
カラオニグモ <i>Araneus tsurusakii</i>	F (Km)
コガタコガネグモ <i>Argiope minuta</i>	y (Km)
コゲチャオニグモ <i>Neoscona punctigera</i>	y (Km)
サツマノミダマシ <i>Neoscona scylloides</i>	y (Km)
トゲグモ <i>Gasteracantha kuhli</i>	y (Km)
ドヨウオニグモ <i>Neoscona adianta</i>	f (Km)

コマチグモ科		
ヤマトコマチグモ <i>Chiracanthium lascivum</i>		M (Km)
エビグモ科		
アサヒエビグモ <i>Philodromus subaureolus</i>		f (Km)
ワシグモ科		
メキリグモ <i>Gnaphosa kompirensis</i>		Mm (Km)
カニグモ科		
コハナグモ <i>Diaea subdola</i>		Mmf (Km)
セマルトラフカニグモ <i>Tmarus rimosus</i>		f (Km)
ワカバグモ <i>Oxytate striatipes</i>		F (Km)
ハエトリグモ科		
アオオビハエトリ <i>Siler cupreus</i>		F (Km)
イナズマハエトリ <i>Pseudicius vulpes</i>		f (Km)
ジャバラハエトリ <i>Helicium yaginumai</i>		M (Km)
ヤサアリグモ <i>Myrmarachne inermichelis</i>		f (Km)
7. 駐車場～楽舎 (N35°33'17" E136°07'36"～N35°33'21" E136°07'31", 標高 205 m)		
ハタケグモ科		
ハタケグモ <i>Hahnica corticicola</i>		F (Km)
ヤチグモ科		
ヨゴヤマヤチグモ <i>Tegeocoelotes yogoensis</i>		f (Km)
タナグモ科		
コクサグモ <i>Allagelena opulenta</i>		y (Km)
コモリグモ科		
イナダハリゲコモリグモ <i>Pardosa agraria</i>		Ff (Km)
サラグモ科		
アトグロアカムネグモ <i>Ummeliata feminea</i>		F (Km)
ユノハマサラグモ <i>Turinyphia yunohamensis</i>		F (Km)
ヒメグモ科		
オナガグモ <i>Ariamnes cylindrogaster</i>		M (Kr)
カレハヒメグモ <i>Enoplognatha abrupta</i>		F (Km)
ムナボシヒメグモ <i>Platnickina sterninotata</i>		f (Km)
アシナガグモ科		
エゾアシナガグモ <i>Tetragnatha yesoensis</i>		Fm (km)
オオシロカネグモ <i>Leucauge magnifica</i>		y (Km)
コシロカネグモ <i>Leucauge subblanda</i>		f (Km)
シナノアシナガグモ <i>Tetragnatha shinanoensis</i>		F (Km)
コガネグモ科		
カラオニグモ <i>Araneus tsurusakii</i>		F (Km)
サツマノミダマシ <i>Neoscona scylloides</i>		y (Km)
エビグモ科		
アサヒエビグモ <i>Philodromus subaureolus</i>		m (Km)
シャコグモ <i>Tibellus japonicus</i>		F (Km)
カニグモ科		
コハナグモ <i>Diaea subdola</i>		mf (Km)
セマルトラフカニグモ <i>Tmarus rimosus</i>		f (Km)
ヤミイロカニグモ <i>Xysticus croceus</i>		MF (Km)
フクログモ科		
ヤギヌマフクログモ <i>Clubiona yaginumai</i>		f (Km)
フクログモ属の一種 <i>Clubiona</i> sp.		F (Kr)
イツツグモ科		
イツツグモ <i>Anyphaena pugil</i>		F (Km, Kr)
ハエトリグモ科		
デーニッツハエトリ <i>Plexippoides doenitzi</i>		M (Km)
マガネアサヒハエトリ <i>Phintella arenicolor</i>		Mmf (Km)
マミジロハエトリ <i>Evarcha albaria</i>		F (Km)
ヤサアリグモ <i>Myrmarachne inermichelis</i>		f (Km)

キジロオヒキグモの網にトビジロイソウロウグモ

関根 幹夫

Occurrence of the kleptoparasitic spider, *Argyrodes cylindratus*, on the web of *Arachnura logio*

Mikio Sekine

トビジロイソウロウグモ *Argyrodes cylindratus* Thorell 1898 (ヒメグモ科) は、盗み寄生者 (kleptoparasite) で、自らは造網せず、寄主が食べない小昆虫や、寄主が捕えた獲物を盗み食いし、時には寄主の網を食べるクモである (新海 2006)。本種が餌盗みに侵入する寄主は、オオシロカネグモ*、ジョロウグモ*、イシサワオニグモ*、オニグモ*、ゴミグモ*、ユノハマヒメグモが報告されている (*は、円網種) (新海明 2007)。また、オオトリノフンダマシについて、直接餌盗みは観察されていないが、本種の寄主である可能性が報告されている (新海明 2002)。このように、トビジロイソウロウグモは円網種を寄主とする傾向のあることが指摘されている (新海明 2007)。

今回、キジロオヒキグモ *Arachnura logio* Yaginuma 1956 (コガネグモ科) の網上に本種が居るところを確認したのでここに報告する (図 1-2)。餌盗み行動を観察していないが、トビジロイソウロウグモはメス成体で体長 5 mm ほどであり、キジロオヒキグモの網の一隅から短い糸を引き吊り下がっていたことから、キジロオヒキグモを寄主としていると推定される。キジロオヒキグモの網型は、円網の内の上部 2 区画に横糸がないキレ網 (完全キレ網) に分類されており (新海 1989)、今回の記録は、本種が円



図 1. キジロオヒキグモの網に居るトビジロイソウロウグモ♀.

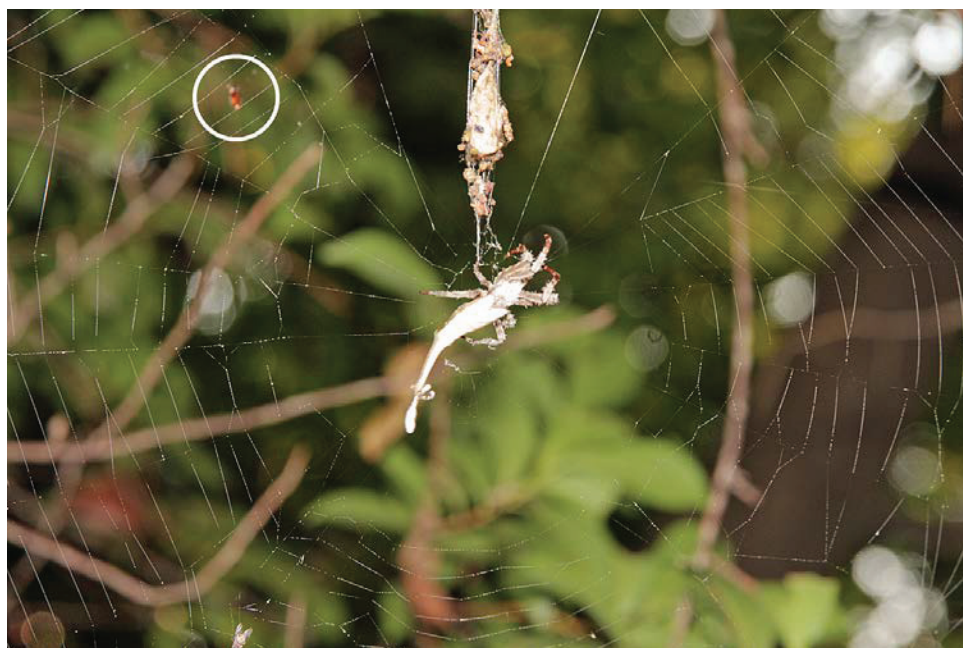


図 2. キジロオヒキグモの網とトビジロイソウロウグモ♀ (白丸の中).

網種の寄主に特殊化していることを示す一例といえよう。

観察記録

2016年8月16日, 奈良県生駒郡三郷町立野, 34°36'11"N, 135°40'54"E, 標高 211 m において, キジロオヒキグモ (♀成体; 体長 23~24 mm) のキレ網 (直径 約 20 cm) の 10 時方向の隅に, 短い糸で吊り下がっているトビジロイソウロウグモ (1♀成体; 体長 約 5 mm) を確認した. 関根確認.

引用文献

- 新海明 2002. トビジロイソウロウグモによるオオトリノフンダマシからの餌盗み. *Kishidaia*, 82: 15.
新海明 2007. イソウロウグモ類のホストの一覧. *Kishidaia*, 91: 21-33.
新海栄一 1989. 日本産造網性クモ類の網型の分類. Pp. 153-179. In: 西川喜朗・小野展嗣 (編), 八木沼健夫教授退職記念論文集. 八木沼健夫教授退職記念論文集刊行会 (大阪), 196 pp.
新海栄一 2006. 日本のクモ. 文一総合出版 (東京), 334 pp.



岡山県の鏡野町で確認したクモ

関根 幹夫

A list of spiders in Kagamino-cho, Okayama Prefecture

Mikio Sekine

岡山県苫田郡鏡野町の富小学校と上齋原小学校で「クモ観察会」を行った際に確認したクモを報告します. 富小学校では全校児童 19 名, 上齋原小学校では全校児童 17 名が参加しました. 富小学校における観察は, 2016 年 3 月をもって廃校となった富中学校の校内, 上齋原小学校では, 小学校の中庭と学校に隣接する職員駐車場で行いました.

観察日と場所: 2016 年 10 月 18 日, 天気: 晴れ, 気温: 22°C

岡山県苫田郡鏡野町富西谷 581-1 鏡野町立富小学校

2016 年 10 月 19 日, 天気: 晴れ, 気温: 19°C

岡山県苫田郡鏡野町上齋原 1320 鏡野町立上齋原小学校

同定者: 関根幹夫

採集あるいは確認されたクモは以下のとおり. ♀♂を記していないものはメス. y は幼体. 場所は, 富西谷 (とみにしだに), 上齋原 (かみさいばら) と記す. 科の配列は, 小野 (2009) に準じ, 学名は省略した.

ユウレイグモ科

イエユウレイグモ (富西谷)

ウズグモ科

カタハリウズグモ (富西谷)

ヒラタグモ科

ヒラタグモ (富西谷, 上齋原)

タナグモ科

クサグモ (富西谷), コクサグモ (富西谷, 上齋原)

キシダグモ科

アズマキシダグモ (上齋原)

コモリグモ科

ウツキコモリグモ (富西谷, 上齋原)

サラグモ科

アシナガサラグモ (富西谷)

ヒメグモ科

オオヒメグモ (富西谷, 上齋原), カグヤヒメグモ (上齋原), オナガグモ (富西谷), シロカネイソウロウグモ (富西谷), カニミジグモ (富西谷)

ジョロウグモ科

ジョロウグモ♂♀ (富西谷, 上齋原)

コガネグモ科

ズグロオニグモ (上齋原), イエオニグモ (富西谷), ナガコガネグモ (富西谷, 上齋原), ゴミグモ (富西谷, 上齋原), シマゴミグモ (富西谷), ギンメッキゴミグモ (富西谷), カラスゴミグモ (富西谷)

シボグモ科

シボグモ y (富西谷)

カニグモ科

ハナグモ (富西谷), ヤミイロカニグモ♂ (富西谷)

文献

小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 神奈川.



近畿大学奈良キャンパスにおけるカトウツケオグモの採集記録

関根幹夫

The first record of *Phrynarachne katoi* Tikuni 1955 (Araneae : Thomisidae) in Nara campus of Kinki University, Nara Prefecture

Mikio Sekine

2015年7月28日に、近畿大学農学部の澤島拓夫准教授により、矢田丘陵の北端部に位置する近畿大学奈良キャンパス（奈良市中町）内の北駐車場脇にあるコナラ林において、カニグモ科のカトウツケオグモの雌成体（体長 8.3 mm）が採集され、筆者は、この標本を同定しました。

カトウツケオグモは、歩脚の第1第2脚の先端（脛節の中間から先端まで）が黒褐色に染まり、その他の歩脚はすべて黄白色です。頭胸部と腹部はすべて黒褐色で、背甲には小さな多数の突起が、腹背には大きな多数の突起があり、その突起の頂点には、それぞれ1本ずつの毛が生えています。葉上に脚を縮めて静止しているありさまは、ちょうど小鳥のフンに似ています（千国 1989, pp. 267–268）。

本種は、希少種で全国的にも発見例の少ないクモであり、新海ほか（2016）によれば、奈良県新記録ですので、ここに報告致します。

引用文献

新海 明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生 2016. CD 日本のクモ ver.2016. CD. 著者自刊.
千国安之輔 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 偕成社, 東京, 309 pp.

ベランダに造網していたセアカゴケグモ

上村友久

筆者は前回、近畿大学奈良キャンパスにて建物2階にセアカゴケグモが造網していたことを報告したが(上村 2016)、今回は自宅の2階ベランダにて同様にセアカゴケグモを確認したため報告する。

観察日 2016年8月17日

観察場所 大阪府茨木市 筆者自宅ベランダ

このベランダでは2016年からクロガケジグモやジョロウグモが確認されていたが、8月に入りセアカゴケグモの幼体を確認した。

網はベランダ手すりの土台から床に向かって張られており、アブラゼミ、アオドウガネなどがかかっていた(図1-3)。

ジョロウグモは軒先など上方寄りに造網していた(図4)が、クロガケジグモは床付近に造網しており(図5)、セアカゴケグモと隣接しているものもあった(ただし巣の主は既になかった)。



図1-2. セアカゴケグモの網が張られたベランダ土台(左)とセアカゴケグモ(右)。



図3. 網にかかっていた獲物。



図 4-5. 軒先に造網するジョロウグモ (左) とセアカゴケグモの網に隣接したクロガケジグモの網 (右).

また, 近大奈良キャンパスの 2 階渡り廊下でもセアカゴケグモの生息を確認した.

観察日 2016 年 8 月 26 日

観察場所 奈良市中町・近畿大学奈良キャンパス 2 階渡り廊下

こちらは前回報告した研究棟 2 階に続く渡り廊下であり, 屋外に面した作りとなっている. 床の端に網が広く張られており, 食事中的セアカゴケグモが確認できた (図 6-7).

一般的にセアカゴケグモは地上付近に造網するとされるが, 大阪府のセアカゴケグモ啓発用冊子では 2 階ベランダにも造網することが示されている (大阪府 2014).

建物の壁や柱に造網していた和歌山県橋本市の例 (赤松 2014, 2015) と異なり, 前回と今回の例では高所とはいえ地面と平行の場所に造網していたことから, やはりこういった場所に定着することは特に珍しいことではないのかもしれない.



図 6-7. 網が張られた廊下の端 (左) と食事中的セアカゴケグモ (右).

引用文献

赤松史憲 2014. セアカゴケグモ報告 一和歌山県橋本市一. くものいと, 47: 50-51.

赤松史憲 2015. セアカゴケグモ報告 その 2 一和歌山県橋本市一. くものいと, 48: 15-17.

上村友久 2016. セアカゴケグモの変った観察事例. くものいと, 49: 2-6.

大阪府 2014. セアカゴケグモ啓発用冊子.

滋賀・京都のクモ類 (2011)

吉田 真

はじめに

2011年に滋賀県と京都府で採集したクモ類のうち、山門湿原以外の地域で採集したクモ類について報告する。

同定にご協力いただいた、谷川明男・加村隆英・西川喜明・池田博明・馬場友希・田中穂積・須黒達巳の各氏に厚く御礼申し上げる。

滋賀・京都クモ類リスト (2011)

♀：メス成体, ♂：オス成体, y：幼体. 数字は個体数である.

滋賀県

大津市滋賀里町夢見が丘 (2011.9.8)

N35°3'59" E135°50'22", 標高 515 m

コモリグモ科

チビコモリグモ ♀4, 卵のうち 4, y1

サラグモ科

ツリサラグモ ♀1

Arcuphantes sp. y1

ユノハマサラグモ y5

ヒメグモ科

オナガグモ y1

ヒシガタグモ y3

フタオイソウロウグモ y1

ホシミドリヒメグモ y1

ムナボシヒメグモ y1

ムラクモヒシガタグモ ♂1

ジョロウグモ科

ジョロウグモ ♂2, ♀1

アシナガグモ科

Leucauge sp. y1*Tetragnatha* sp. y2

コガネグモ科

Araniella sp. y2

カラオニグモ y1

コマチグモ科

Cheiracanthium sp. y2

エビグモ科

アサヒエビグモ y16

シャコグモ y1

カニグモ科

Xysticus sp. y3

アマギエビスグモ y6

クマダハナグモ ♂y2, y3

コハナグモ y7

セマルトラフカニグモ y6

ワカバグモ y10

フクログモ科

Clubiona sp. y5

ウエムラグモ科

イタチグモ y1

ネコグモ科

ネコグモ y2

ハエトリグモ科

デーニッツハエトリ y1

ヒメカラスハエトリ y2

比叡山桜茶屋 (2011.9.16)

N35°3'30" E135°50'14", 標高 590 m

エンマグモ科

コマツエンマグモ ♂1

タマゴグモ科

ダニグモ ♂1, y2

ウズグモ科

マネキグモ y1

タナグモ科

Cicurina sp. ♀1

ヤチグモ科

ヒメシモフリヤチグモ ♀1

コモリグモ科

チビコモリグモ ♀1

センショウグモ科

センショウグモ y3

サラグモ科

アシナガサラグモ ♂1, ♀3

カンサイアリマネグモ ♂1

コデーニッツサラグモ ♂y4, y44

Arcuphantes sp. ♂y6, y9

ヒメグモ科

カニミジグモ ♀1, y1

ツリガネヒメグモ y1

ハラナガヒシガタグモ y2

ムナボシヒメグモ ♀1

アシナガグモ科

Tetragnatha sp. y1

キンヨウグモ ♂1

シナノアシナガグモ y9

コガネグモ科

Araniella sp. y2

オオクマヤミイロオニグモ y6

カラフトオニグモ y2

シロスジショウジョウグモ y1

ハツリグモ	y1
ヤミイロオニグモ	y1
ヨツデゴミグモ	♂y1
イヅツグモ科	
イヅツグモ	y1
アシダカグモ科	
コアシダカグモ	y1
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y3
アマギエビスグモ	♂y1, y3
クマダハナグモ	y1
コハナグモ	y1
トラフカニグモ	♂y1, y2
ワカバグモ	y4
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y16
ネコグモ科	
ネコグモ	y9
<i>Phrurolithus</i> sp.	y3
ハエトリグモ科	
デーニッツハエトリ	y1
<i>Neon</i> sp.	y3

延暦寺道溪流 (2011.9.16)
N35°3'40" E135°50'14", 標高 600 m

タナグモ科	
コクサグモ	♂y1
サラグモ科	
ツリサラグモ	y1
ムネグロサラグモ	y1
ヒメグモ科	
オナガグモ	y1
コガネヒメグモ	y1
ツクネグモ	y1
バラギヒメグモ	y1
アシナガグモ科	
<i>Leucauge</i> sp.	y2
シナノアシナガグモ	y11
コガネグモ科	
オオクマヤミイロオニグモ	y2
ヨツデゴミグモ	y8
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y14
エビグモ科	
アサヒエビグモ	y1
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y1
アマギエビスグモ	♂y5, y2
クマダハナグモ	♂y1, y1
コハナグモ	y5
トラフカニグモ	y1
ワカバグモ	y2
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y6
クロサワフクログモ	♂1
イヅツグモ科	
イヅツグモ	y1
ネコグモ科	
ネコグモ	y1

ハエトリグモ科	
マミジロハエトリ	♂1

延暦寺道 2 (2011.9.16)
N35°3'35" E135°50'30", 標高 600 m

サラグモ科	
ユノハマサラグモ	y2
ヒメグモ科	
シモフリミジグモ	♂y1
ヒシガタグモ	y1
ジョロウグモ科	
ジョロウグモ	♀1
コガネグモ科	
オオクマヤミイロオニグモ	y2
エビグモ科	
アサヒエビグモ	y3
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y1
アマギエビスグモ	y2
ガザミグモ	y1
クマダハナグモ	y1
ハナグモ	y1
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y1
ネコグモ科	
ネコグモ	y2
ハエトリグモ科	
デーニッツハエトリ	y1

ホテルド比叡 (2011.9.16)
N35°3'17" E135°50'3", 標高 520 m

サラグモ科	
アシナガサラグモ	♀1
ムネグロサラグモ	y1
ユノハマサラグモ	y6
ヒメグモ科	
カニミジグモ	y1
ニホンヒメグモ	y1
ハラナガヒシガタグモ	y1
ヒシガタグモ	y1
ホシミドリヒメグモ	y2
ジョロウグモ科	
ジョロウグモ	♀1
アシナガグモ科	
<i>Tetragnatha</i> sp.	y2
キンヨウグモ	♀1
シナノアシナガグモ	y6
コガネグモ科	
<i>Araneus</i> sp.	y1
<i>Araniella</i> sp.	y3
ヤミイロオニグモ	y1
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y4
エビグモ科	
シャコグモ	y1
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y1
アマギエビスグモ	y6
ワカバグモ	y6

フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y6
イヅツグモ科	
イヅツグモ	y2
ネコグモ科	
ネコグモ	y2
ハエトリグモ科	
<i>Marpissa</i> sp.	y1
デーニッツハエトリ	♀1, ♂y1

東近江市延命山 (2011.10.1 採集者: 布村昇)
N35°5'45" E136°19'10" 標高 300 m

コモリグモ科	
クラークコモリグモ	♀1

近江八幡市沖島町 (2011.10.5 採集者: 布村昇)
N35°12'30" E136°3'50" 標高 190 m

サラグモ科	
カンサイアリマネグモ	♂1
ヒメグモ科	
ヒシガタグモ	y1
ヨリメグモ科	
ヨロイヒメグモ	♂4, ♀4
ウエムラグモ科	
イタチグモ	y2

長浜市西浅井町斎場上 (2011.10.23 採集者: 布村昇)
N35°31'20" E136°7'15" 標高 170 m

サラグモ科	
スソグロサラグモ	y1
ヒメグモ科	
カニミジグモ	y2
ギボシヒメグモ	y1
バラギヒメグモ	y1
ムナボシヒメグモ	♂y1
アシナガグモ科	
<i>Leucauge</i> sp.	y1
アシナガグモ	y1
ウロコアシナガグモ	y1
キンヨウグモ	♂1, ♀1
コガネグモ科	
オオクマヤミロオニグモ	♂y1
ギンメッキゴミグモ	♀1
カニグモ科	
ワカバグモ	y3
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y2
ネコグモ科	
ネコグモ	y2
ハエトリグモ科	
アリグモ sp.	y2
ヤサアリグモ	y1

大津市圓山圓山公園 (2011.11.2 採集者: 布村昇)
緯度・経度・標高不明

トタテグモ科	
キシノウエトタテグモ	y5

大津市葛川貫井町 (2011.11.3 採集者: 布村昇)
N35°16'32" E135°52'35" 標高 250 m

ナミハグモ科	
Gen sp.	♂y1
タナグモ科	
<i>Cicurina</i> sp.	♂1
カニグモ科	
<i>Oxyptila</i> sp.	y1
キハダカニグモ	y5
サラグモ科	
Gen sp.	♂y1

長浜市中河内廣峰神社 (2011.11.3 採集者: 布村昇)
緯度・経度・標高不明

ナミハグモ科	
ビワコガタナミハグモ	♀1
ネコグモ科	
<i>Phrurolithus</i> sp.	y1
コムラウラシマグモ	♂1

近江八幡市宮内町日牟礼八幡宮 (2011.11.14 採集者: 布村昇) N35°8'25" E136°5'25" 標高 80 m

サラグモ科	
Gen sp.	♂1

大津市坂本大比叡下 (2011.11.15 採集者: 布村昇)
N35°4'15" E135°50'15" 標高 780 m

ハタケグモ科	
ヤマハタケグモ	y1
カニグモ科	
ワカバグモ	y1
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y1

大津市伊香立上龍華町 (2011.11.30)
N35°7'40" E135°43'05" 標高 190 m

ウズグモ科	
カタハリウズグモ	y1
タナグモ科	
コクサグモ	♀1
キシダグモ科	
アズマキシダグモ	♂y8, y3
イオウイロハシリグモ	y28
コモリグモ科	
ウツキコモリグモ	♂y1, y6
ササグモ科	
ササグモ	y7
サラグモ科	
クロナンキングモ	♀9, y2
スソグロサラグモ	y2
セスジアカムネグモ	♀2
セムシアカムネグモ	♀1
アシナガグモ科	
アシナガグモ	y6
ウロコアシナガグモ	y3
メガネドヨウグモ	♂y1, y4
ヤサガタアシナガグモ	y31
ヨツボシヒメアシナガグモ	♂3, ♀3

コガネグモ科	
<i>Araniella</i> sp.	y1
<i>Cyclosa</i> sp.	y1
<i>Hipsosinga</i> sp.	♂y9, y18
カラオニグモ	y1
ナカムラオニグモ	♂y1, y1
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y2
エビグモ科	
アサヒエビグモ	y38
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y7
アマギエビスグモ	♂y8, y3
コハナグモ	y1
ハナグモ	y1
ワカバグモ	y2
ハエトリグモ科	
<i>Marpissa</i> sp.	y1
<i>Phintella</i> sp.	y2
ヒメカラスハエトリ	y1
マミジロハエトリ	y3
ヤサアリグモ	♂y1
ヒメグモ科	
タカユヒメグモ	y1
フクログモ科	
<i>Chubiona</i> sp.	y5
ヤチグモ科	
ヨゴヤマヤチグモ	♂1

京都府

雲ヶ畑足谷 (2011.5.7)

N35°7'40" E135°43'05" 標高 330 m

キシダグモ科	
アズマキシダグモ	♂y1
コモリグモ科	
<i>Pirata</i> sp.	y5
サラグモ科	
クスマサラグモ	♀2
デーニッツサラグモ	♀1
ユノハマサラグモ	♂4, ♀1
ヒメグモ科	
フタオイソウロウグモ	♂y2
アシナガグモ科	
ウロコアシナガグモ	y1
シボグモ科	
シボグモ	y1
イツツグモ科	
イツツグモ	♂1
エビグモ科	
アサヒエビグモ	y4
カニグモ科	
チクニエビスグモ	♂2, y5
ワカバグモ	y1
ハエトリグモ科	
ウススジハエトリ	y3

雲ヶ畑足谷下 (2011.5.16)

N35°7'40" E135°43'05" 標高 330 m

ウズグモ科	
カタハリウズグモ	y1
キシダグモ科	
イオウイロハシリグモ	y6
ヤチグモ科	
ヒメヤマヤチグモ	♀1
コモリグモ科	
<i>Pirata</i> sp.	y1
サラグモ科	
ナンキンヌカグモ	♀1
クスマサラグモ	♂4, ♀7
ムネグロサラグモ	♂1, ♀1
ユノハマサラグモ	♂2, ♀22
ヒメグモ科	
アシプトヒメグモ	y1
カニミジグモ	♂y1
ボカシミジグモ	♀1
ムナボシヒメグモ	y1
ユノハマヒメグモ	♂y1
アシナガグモ科	
ウロコアシナガグモ	♂y2, y16
オオシロカネグモ	y2
コシロカネグモ	y1
シナノアシナガグモ	♀2
タニマノドヨウグモ	♂y1

コガネグモ科

オオクマヤミイロオニグモ	♀1
カラフトオニグモ	♂1
ヤマトカナエグモ	♂y1, y2
ヨツデゴミグモ	♂y1, y1

イツツグモ科

イツツグモ	y3
カニグモ科	
コハナグモ	y4
セマルトラフカニグモ	y1
チクニエビスグモ	♂1, y8

フクログモ科

<i>Chubiona</i> sp.	♀1, ♂y1
---------------------	---------

ネコグモ科

ネコグモ	y1
------	----

ハエトリグモ科

ウススジハエトリ	♀3
デーニッツハエトリ	♀1
ヒメカラスハエトリ	y1

雲ヶ畑奥 (2011.6.4)

N35°8'30" E135°43'20" 標高 440 m

キシダグモ科	
イオウイロハシリグモ	y1
コモリグモ科	
ナミコモリグモ	♀3, y2
サラグモ科	
Gen sp. 1	♀1
Gen sp. 2	♀1
ヌカグモ	♂2
クスマサラグモ	♀1
ユノハマサラグモ	♀13

ヒメグモ科	
ムナボシヒメグモ	♀1, y1
アシナガグモ科	
ウロコアシナガグモ	♂1, y2
シナノアシナガグモ	♀1, y1
タニマノドヨウグモ	♂1, y2
コガネグモ科	
ヤマトカナエグモ	♂2
シボグモ科	
シボグモ	♀1, y1
イツツグモ科	
イツツグモ	♀2
カニグモ科	
アマギエビスグモ	♀1
コハナグモ	y1
チクニエビスグモ	♀1
ヤミイロカニグモ	♂1
ネコグモ科	
ネコグモ	♀1
ハエトリグモ科	
ウススジハエトリ	♂y1, y2

雲ヶ畑奥支流 (2011.6.4)

N35°8'40" E135°43'35" 標高 520 m

ウズグモ科	
ヤマウズグモ	♀2
キシダグモ科	
イオウイロハシリグモ	y3
コモリグモ科	
<i>Pirata</i> sp.	♂y1, y4
センショウグモ科	
オオセンショウグモ	♀1
センショウグモ	y1
サラグモ科	
クスミサラグモ	♀2
シバサラグモ	♀1
ユノハマサラグモ	♀3
ヒメグモ科	
スネグロオチバヒメグモ	♂y1
フタオイソウロウグモ	y1
アシナガグモ科	
ウロコアシナガグモ	♂1, y1
オオシロカネグモ	♂y2, y3
コシロカネグモ	♀1
シナノアシナガグモ	♀1
コガネグモ科	
<i>Cyclosa</i> sp.	y1
カラフトオニグモ	♀1
サガオニグモ	♀1
シロスジショウジョウグモ	♀1, y1
ヤマトカナエグモ	♀2
イツツグモ科	
イツツグモ	y2
カニグモ科	
チクニエビスグモ	y3
ウエムラグモ科	
イタチグモ	y2
ハエトリグモ科	
ジャバラハエトリ	♀1

ネオンハエトリ	♂1
---------	----

雲ヶ畑中津川 (2011.6.4)

N35°7'20" E135°43'45" 標高 300 m

ウズグモ科	
カタハリウズグモ	y1
マネキグモ	y1
タナグモ科	
コクサグモ	y12
キシダグモ科	
イオウイロハシリグモ	y4
ヤチグモ科	
ホラズミヤチグモ	♂1
コモリグモ科	
ミナミコモリグモ	♂1, ♀3
ウツキコモリグモ	♂1
センショウグモ科	
センショウグモ	♀1
サラグモ科	
ツノタテグモ	♂1, ♀2
コサラグモ	♀1
アシナガサラグモ	y2
クスミサラグモ	♀1
ズキンヌカグモ	♀2
ムネグロサラグモ	♂3, ♀1
ユノハマサラグモ	♀3
ヒメグモ科	
スネグロオチバヒメグモ	♂y1
チリイソウロウグモ	y2
ツリガネヒメグモ	y1
バラギヒメグモ	♀1
ボカシミジグモ	y1
ヤリグモ	♂1
アシナガグモ科	
<i>Leucauge</i> sp.	y3
コシロカネグモ	♀1
シナノアシナガグモ	♀1
タニマノドヨウグモ	y1
コガネグモ科	
ヨツデゴミグモ	♀1
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y1
シボグモ科	
シボグモ	y1
カニグモ科	
ゾウシキカニグモ	♀1
チクニエビスグモ	♀1
ヤミイロカニグモ	♀2
ワカバグモ	y1
ネコグモ科	
ネコグモ	♀2
ハエトリグモ科	
ウススジハエトリ	y1
コジャバラハエトリ	♀1
デーニツツハエトリ	y1
マミジロハエトリ	♀1

比叡石鳥居 (2011.9.8)

N35°3'10" E135°49'05" 標高 400 m

ウズグモ科	
マネキグモ	y1
ハタケグモ科	
ヤマハタケグモ	♂y1
キシダグモ科	
アズマキシダグモ	y1
サラグモ科	
<i>Nippononeta</i> sp.	♂y1
ジョロウグモ科	
ジョロウグモ	♂1
アシナガグモ科	
<i>Tetragnatha</i> sp.	y1
コガネグモ科	
ヤマトカナエグモ	y1
ヨツデゴミグモ	y1
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y3
エビグモ科	
シヤコグモ	y1
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y1
クマダハナグモ	y2
コハナグモ	y5
セマルトラフカニグモ	y1
チクニエビスグモ	y1
ワカバグモ	y1
ウエムラグモ科	
イタチグモ	y1
ネコグモ科	
キレオビウラシマグモ	y5
コムラウラシマグモ	y2
ハエトリグモ科	
<i>Marpissa</i> sp.	y2
デーニッツハエトリ	y1

比叡五合水 (2011.9.8)

N35°3'10" E135°48'50" 標高 440 m

サラグモ科	
アシナガサラグモ	♀1
ツリサラグモ	y1
ヒメグモ科	
ヒシガタグモ	y1
ボカシミジグモ	y1
アシナガグモ科	
キンヨウグモ	y2
シナノアシナガグモ	y2
コガネグモ科	
ギンメッキゴミグモ	♀2
トゲグモ	♀1
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y4
セマルトラフカニグモ	y1
ネコグモ科	
ネコグモ	y3

比叡弁財天碑 (2011.9.8)

N35°3'10" E135°49'25" 標高 440 m

タマゴグモ科	
ダニグモ	♀1
ナミハグモ科	
Gen sp.	♂y2, y6
カチドキナミハグモ	♀1
コモリグモ科	
<i>Pirata</i> sp.	y7
ウヅキコモリグモ	y1
チビコモリグモ	♀2
ヒメグモ科	
カニミジグモ	y1
カニグモ科	
トラフカニグモ	y1

比叡山人工スキー場 (2011.9.14)

N35°4'0" E135°49'35" 標高 770 m

キシダグモ科	
アズマキシダグモ	y1
コモリグモ科	
<i>Pardosa</i> sp.	y1
チビコモリグモ	♀5
サラグモ科	
デーニッツサラグモ	♀1
<i>Arcuphantes</i> sp.	♂y6, y10
アシダカグモ科	
Gen sp.	y1
カニグモ科	
オビボソカニグモ	y1
ハエトリグモ科	
ウススジハエトリ	♂1

グランドミュージアム比叡 (2011.9.14)

N35°3'54.4" E135°49'37.5" 標高 825 m

マシラグモ科	
Gen sp.	♀1
タナグモ科	
コクサグモ	♂3, ♀1
コモリグモ科	
<i>Trochosa</i> sp.	♂y1, y1
ウヅキコモリグモ	y1
ハリゲコモリグモ	y3
サラグモ科	
フタスジサラグモ	♂1, ♀16
アシナガサラグモ	y1
スソグロサラグモ	y2
ムネグロサラグモ	y4
ユノハマサラグモ	y3
ヒメグモ科	
<i>Parasteatoda</i> sp.	y10
アマミミジグモ	♂1, ♀9, ♂y9, y15
カグヤヒメグモ	♀1
シモフリヒメグモ	y2
シモフリミジグモ	♂4, ♀7
ヒシガタグモ	♂y1, y3
ボカシミジグモ	y1
ムナボシヒメグモ	♂y2, y26
ユノハマヒメグモ	y1

アシナガグモ科		カラフトオニグモ	y1
<i>Metleucauge</i> sp.	y1	コオニグモモドキ	y1
ウロコアシナガグモ	y4	ヨツデゴミグモ	♂y1
コシロカネグモ	y5	エビグモ科	
コガネグモ科		アサヒエビグモ	y7
<i>Araneus</i> sp.	♂y1, y2	キンイロエビグモ	y1
<i>Araniella</i> sp.	y21	カニグモ科	
<i>Cyclosa</i> sp.	y1	<i>Xysticus</i> sp.	y2
カラフトオニグモ	y34	アマギエビスグモ	♂y7, y9
ギンメッキゴミグモ	♀1, y1	クマダハナグモ	♂y1, y3
コマチグモ科		コハナグモ	y2
アカスジコマチグモ	y12	ワカバグモ	♂y1, y15
イツツグモ科		フクログモ科	
イツツグモ	♂y1, y3	<i>Clubiona</i> sp.	y6
エビグモ科		ネコグモ科	
アサヒエビグモ	y37	<i>Phrurolithus</i> sp.	♂y1, y2
キンイロエビグモ	y6	コムラウラシマグモ	♂2
カニグモ科		ネコグモ	y8
<i>Xysticus</i> sp.	y1	ハエトリグモ科	
アマギエビスグモ	♂y11, y22	ジャバラハエトリ	♀1
オビボソカニグモ	y1	デーニッツハエトリ	♂1, y2
クマダハナグモ	y1	ヨダンハエトリ	♀1
コハナグモ	y19		
チクニエビスグモ	♂y1, y20		
フクログモ科			
ヤハズフクログモ	♀1, y1		
ネコグモ科			
<i>Phrurolithus</i> sp.	y2		
ネコグモ	y5		
ハエトリグモ科			
Gen sp.	y4		
オオハエトリ	♀1		
カラスハエトリ	♂1		
グランドミュージアム比叡西口下 (2011.9.14)			
N35°3'54.4" E135°49'37.5" 標高 780 m			
タナグモ科			
コクサグモ	♂y1		
キンダグモ科			
アズマキンダグモ	y1		
コモリグモ科			
イモコモリグモ	♀1		
サラグモ科			
フタスジサラグモ	♂1		
ムネグロサラグモ	♀1, y5		
ユノハマサラグモ	y3		
ヒメグモ科			
アマミミジグモ	♀1, y1		
カニミジグモ	♂y1		
ヒシガタグモ	y3		
ムナボシヒメグモ	y1		
ユノハマヒメグモ	y1		
アシナガグモ科			
<i>Leucauge</i> sp.	y1		
<i>Metleucauge</i> sp.	y2		
コガネグモ科			
<i>Araneus</i> sp.	y2		
<i>Araniella</i> sp.	y2		
<i>Argiope</i> sp.	y1		
		カラフトオニグモ	y1
		コオニグモモドキ	y1
		ヨツデゴミグモ	♂y1
		エビグモ科	
		アサヒエビグモ	y7
		キンイロエビグモ	y1
		カニグモ科	
		<i>Xysticus</i> sp.	y2
		アマギエビスグモ	♂y7, y9
		クマダハナグモ	♂y1, y3
		コハナグモ	y2
		ワカバグモ	♂y1, y15
		フクログモ科	
		<i>Clubiona</i> sp.	y6
		ネコグモ科	
		<i>Phrurolithus</i> sp.	♂y1, y2
		コムラウラシマグモ	♂2
		ネコグモ	y8
		ハエトリグモ科	
		ジャバラハエトリ	♀1
		デーニッツハエトリ	♂1, y2
		ヨダンハエトリ	♀1
		左京区修学院辻の田町 (2011.10.5)	
		N35°3'7" E135°48'8" 標高 150 m	
		タナグモ科	
		コクサグモ	♂2, ♀5
		キンダグモ科	
		イオウイロハシリグモ	y25
		コモリグモ科	
		ナミコモリグモ	♀3, ♂y8
		ササグモ科	
		ササグモ	y5
		サラグモ科	
		アトグロアカムネグモ	♀1
		アシナガグモ科	
		アシナガグモ	y28
		ヒメアシナガグモ	y1
		メガネドヨウグモ	y1
		ヤサガタアシナガグモ	y16
		コガネグモ科	
		ナガコガネグモ	♀1
		エビグモ科	
		アサヒエビグモ	y7
		カニグモ科	
		アズチグモ	y2
		コハナグモ	y15
		セマルトラフカニグモ	y1
		ハナグモ	♂3, y15
		ワカバグモ	y2
		フクログモ科	
		<i>Clubiona</i> sp.	y4
		ハエトリグモ科	
		オスクロハエトリ	♂1
		キレワハエトリ	y1
		マミジロハエトリ	♂1, ♀1

八幡市背割桜 (2011.10.28)

N34°53'30" E135°41'0" 標高 50 m

コモリグモ科

<i>Pirata</i> sp.	y3
ウツキコモリグモ	♂y3, y3
エビチャコモリグモ	♂2
ササグモ科	
ササグモ	y1
サラグモ科	
クロナンキングモ	♂1, ♀1
スソグロサラグモ	y3
ヒメグモ科	
ヤホシヒメグモ	y6
アシナガグモ科	
<i>Leucauge</i> sp.	y8
アシナガグモ	y12
ウロコアシナガグモ	y9
トガリアシナガグモ	y2
ヤサガタアシナガグモ	y2
コガネグモ科	
キザハシオニグモ	y3
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y11
シボグモ科	
シボグモ	y1
カニグモ科	
ハナグモ	♂2, y1
アズマキシダグモ	y4
イオウイロハシリグモ	y30
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y4
ミチノクフクログモ	♂1, ♀1
ネコグモ科	
オトヒメグモ	♀1
ハエトリグモ科	
<i>Phintella</i> sp.	y7
ヤハズハエトリ	♂y1, y3
オスクロハエトリ	♂1, y1
マミクロハエトリ	♂4, y1
メガネアサヒハエトリ	♀1

八幡市淀川河川敷公園 (2011.10.28)

N34°53'30" E135°41'30" 標高 40 m

タナグモ科

コクサグモ	♀1
キシダグモ科	
アズマキシダグモ	y1
イオウイロハシリグモ	y5
ササグモ科	
ササグモ	y4
サラグモ科	
スソグロサラグモ	♂1, y1
ジョロウグモ科	
ジョロウグモ	♀1
アシナガグモ科	
<i>Leucauge</i> sp.	y19
アシナガグモ	y6
ウロコアシナガグモ	y2
トガリアシナガグモ	y6
ヤサガタアシナガグモ	y1
ヒメグモ科	
シロカネイソウロウグモ	y11
ヤホシヒメグモ	y1
コガネグモ科	
<i>Cyclosa</i> sp.	y1
<i>Larinia</i> sp.	y1
ナガコガネグモ	♀1
コマチグモ科	
<i>Cheiracanthium</i> sp.	y1
エビグモ科	
アサヒエビグモ	y1
カニグモ科	
<i>Xysticus</i> sp.	y1
ハナグモ	♂2, y3
フクログモ科	
<i>Clubiona</i> sp.	y7
ハエトリグモ科	
アリグモ sp.	y3
ヤハズハエトリ	♂y1
マミジロハエトリ	♀1
ヤガタアリグモ	♂y1

府県新記録種など

滋賀県の新記録種はカンサイアリマネグモ (サラグモ科), の1種であった (吉田, 2014, 2016 ; 新海ほか, 2014). これに加えてタナグモ科の *Cicurina* sp. とサラグモ科の *Gen* sp. は, 成体であるが同定できなかった. おそらくは未記載種と思われる.

京都府の新記録種は, ナンキンヌカグモ, ツノタテグモ, フタスジサラグモ (サラグモ科), アマミジグモ (ヒメグモ科), シロスジショウジョウグモ (コガネグモ科), ミチノクフクログモ (フクログモ科), チクニエビスグモ, オビボソカニグモ (カニグモ科), ネオンハエトリ (ハエトリグモ科) の9種であった (吉田, 2014, 2016 ; 新海ほか, 2014). これに加えて, サラグモ科の2種とマンラグモ科の1種, フクログモ科の *Clubiona* sp. の4種は, 成体であるが同定できなかった. おそらくは未記載種と思われる.

引用文献

- 吉田真 2014. 比叡山のクモ類 I. 蜘蛛 (KUMO), 47 : 1370-1379.
 吉田真 2016. 滋賀・京都のクモ類 (2010). くものいと, 47 : 10-16.
 新海明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生 2014. CD日本のクモ Ver. 2014. 著者自刊, CD.

日本蜘蛛学会訪問記

長崎 緑子

【東大では16年ぶりの開催だった学会】

8月20日～21日に東京大学柏キャンパス（千葉県柏市）であった、日本蜘蛛学会に参加した。2002年にクモとは関係ない新聞社に勤めて以来、忙しくてクモから遠ざかっていたものの、2年前に東京本社に赴任してからは、仕事の融通がきくようになったので、久々の学会参加となった。

参加してみると、参加者の老け具合から発表での動画の多さなど、いろいろ隔世の感がある。そのあたりを訪問記で紹介したくなった。そこで、いつもお世話になっている谷川明男さんに「東京談話会誌で載せてくれませんか？」と頼んだが、「ゴメン、もう学生に頼んでる」。まさかの投稿前プロジェクトのうちひしがれていると、ちょうど飄々と歩く吉田真先生が見えた。すかさず「関西クモ研究会の雑誌で訪問記はいりませんか。現役記者が書きます」と売り込むと、「『くものいと』あるんちゃう」と、救いの手をさしのべてくれ、この訪問記が書けることになった。

【進歩する講演】

学会開会は、宮下直大会委員長のあいさつから始まった。この学会が東大開催なのは、まだ私が宮下先生の研究室にいた2000年に東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）であった学会開催以来になるはずだ。16年前の学会当時は40歳ぐらいで、ちょっとエッジがたったところもあった宮下先生が「開催地の柏キャンパスにはノーベル賞受賞者の梶田先生がつとめる研究所もあります」などと、軽いネタをあいさつに取り入れている。宮下先生も私も年取ったなあと感じた。

開会のあいさつが終わると、さっそく一般講演だ。宮下研の後輩らがいつの間にか脂ののった研究者になっていて、環境保全型水田におけるクモの動態について講演をしていた。実験モデルや統計に疎くなった身には内容が難しいものの、「最近では慣行栽培水田だって、農薬代や肥料代を安くするためにそんなに薬はまいていないから、環境保全型農業とそんなにクリアな差はでない中で苦労して解析してんだらうな」とか「水田で最近のトピックは耕作放棄地だから、そのあたりも実験モデルに組み入れればいいのに」などといった感想をもった。

座長が交代し、田中一裕さんが登場した。普段、当たり前のように思われていた「活動時間帯＝餌を捕獲する時間帯」が本当なのかという仮説をたて、それを実験と過去の論文にある観察結果を照らし合しながら確かめていた。普段陥りやすい「思い込み」を問題視して、それを科学的に調べるお手本のような講演は、昔から変わらないようだった。田中さんの次は、中田兼介さんの講演で、交接班時に外雌器の付属機関である垂体の切除に関するものだった。垂体が交接班後に残るか残らないかで、雄がどれだけ自身の遺伝子を残せるのかという話題で興味深かった。発表も、ITの進歩で急速に利用が進む動画を駆使したもので直感的にも楽しかった。ただ、クモだからよいものの、ヒトの動画だったらわいせつ物陳列罪に問われるだろうと、いらぬ心配をしてしまった。

1日目午前の部最後は、韓国のキム・ヨーピルさんらによる英語の講演だった。「ストローバンド」と聞けば、何かしらと身構えてしまうが、要は冬にマツに巻く「こもまき」の中にどれだけクモがいたかという話だった。こもの中にいた虫の7割がクモで3割が昆虫という結果で、日本同様に韓国でもこもは焼かれてしまうので、クモにとっては災難だ。ちなみに、こもの中に肝心の害虫（たぶんマツカレハ）はいないというのも日本で何回か見かけたこもまき調査の結果と一緒だった。

【話題の店で海鮮丼を食べて午後部の部へ】

昼休みは、海洋研究所の教員が呼び寄せたという寿司屋「お魚倶楽部はま」の海鮮丼（750円）を榊元夫妻と船曳和代さんと同じテーブルで食べた。関東では、丼とともに、しょうゆを入れる小皿が付いてくるが、関西人の榊元さんと船曳さんは「この皿は？」不可思議そうだった。

昼食後は口頭講演3題のあと、ポスター発表だった。ここで、良い意味でも悪い意味でも人目を引いたのが、島野智之さんのポスターだ。ダニ類の系統関係について最新の論文などから考察したものだが、どこに結論が書かれているのかいまいち分からない。あと、パラパラマンガのよ

うにポスターの下に別のポスターが隠れていた。ただ、島野さん紙をめくりながら説明すれば、話の流れは至極わかりやすかった。ポスター発表といえども、発表者と聴衆とコミュニケーションによって、発表の質が高まるんだなあと思った。

【プレゼン上手が登場した公開シンポ】

口頭講演 12 題と 10 題のポスター発表が終わって、14 時過ぎになったところで、公開シンポジウムが始まった。最初は、米国カリフォルニア大から招待したシェリル・ハヤシさんの基調講演だ。「英語で DNA の話をする」と聞くと身構えてしまうが、実際のところは、クモの糸をつくる腺が糸ごとに違うことなど、ありきたりの話も多かった。DNA 分析に用いるクモとしてセアカゴケグモを使っていることあたりまでは、つたない英語力でも分かった。ただ、内容が分かるかどうかに関わらず、感心したのがハヤシさんのプレゼン。会場の左右をバランス良く見渡しなが自信たっぷりに話す姿は圧巻だった。

ハヤシさんの講演に続いて、最新の DNA シーケンサーや兵庫の山奥にある理研の大型施設 SPring8 を用いた解析の講演があった。しかし、これは本当に小難しかった。どっぷり SPring8 を取材していた記者の経験から言わせてもらえば、多額の税金が投入された施設で研究しているんだから、もう少し、専門外の人にも分かりやすく話す努力をしてもらいたかった。

小難しい講演の後には、新海明さんがヨリメグモやナルコグモが水面に張る網について話し、宮下先生がトリノフンダマシの網について話した。トリノフンダマシについては、まとまった話を聞く前に宮下研を卒業していたので、いい機会だった。

発表の後には総会があって、1 日目の発表は終了。久々に頭の中がクモワールドになったまま、懇親会へ。そして、二次会へ……。久々のクモ学会でくたくたに疲れていたこともあり、昔ほどは飲めなくなっていた。一方で、若い子が元気に飲んでおり、やはり年齢を感じてしまった。

【眠気を覚ます 2 日目午前の部】

学会 2 日目は、9 時開始。前日、二次会まで飲んで電車で 1 時間半の自宅から通っていたので、とても眠たい。そんな眠気を吹っ飛ばすのが、浅間茂さんの「クモ実験・観察 3 題」だった。1 講演に 3 つの話をしてしまお



図 1. 島野さんのポスター。



図 2. プレゼン上手のシェリル林。

うという盛りだくさんな野心的な講演. 生で十分聞こえる声量なのに, マイクを通じて増幅され, 眠っていた馬場友希くんの娘が起きて泣き出すほど, 会場中にマシンガントークが響き渡った.

その後は, 来年の学会開催地である沖縄の佐々木健志さんから, 沖縄県レッドデータブック改訂を進めながら得たヤイトムシ類の生態について得た知見の発表があり, 鳥取大の鶴崎展巨先生のザトウムシ, 谷川さんらのイソコモリグモ, 井原庸さんのヤミサラグモ, 山崎健史くんのアリグモといった, それぞれのライフワーク的な発表が続き, 学会は終了した.

正味1日半で, 口頭25題にポスター10題, 加えて基調講演も加えたシンポジウム5題が一気に駆け抜けていった学会だった. そして来年は沖縄. 夏の台風シーズンをずらした10月ごろの開催となるらしいので, 夏休みをずらしてなんとか参加できないものだろうかと思案しているところだ.



図3. 大会期日入りペン.

茨木市で採集したキシノウエトタテグモ

上村友久

筆者は茨木市内において, キシノウエトタテグモの雌を採集したため報告する.

採集年月日 2016年10月9日

採集地 大阪府茨木市太田3-6-18 茨木市立太田公民館

この個体は公民館入り口の地面で死んでいるところを発見し, 持ち帰って標本にした(図1).

本種は都心部に多く産しているが(新海2006), 生息地である社寺や庭園, 林道などの改修工事の影響を受けやすく, 環境省レッドデータブックおよび大阪府レッドリストでは準絶滅危惧種に指定されている(環境省2014; 大阪府2014).

採集地は太田茶臼山古墳に隣接している. この古墳は堀に囲まれた常緑樹林を有しており, 人の立ち入りは禁止されている. このことから良好な自然が残されており, 本種の生息地になっているものと考えられる.

引用文献

大阪府 2014. 大阪府レッドリスト2014. 大阪府.

環境省編 2014. レッドデータブック2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物7 その他無脊椎動物(クモ形類・甲殻類等). 環境省.

新海栄一 2006. ネイチャーガイド 日本のクモ. 文一総合出版.



図1. キシノウエトタテグモ.

アシブトハエトリの飼育報告

榎元 智子

2016年6月5日、自宅（滋賀県大津市大谷町）の近くでアシブトハエトリを採集した（図1）。採集時は種名が分からなかったが、初めて見る大きなハエトリだったので、とりあえず生きたまま採集した。図鑑で調べると、アシブトハエトリの雌だと分かった。これまでアシブトハエトリの報告はほとんどなかったので、飼育して観察することにした。ここに簡単に報告する。



図1. 採集日に撮影：後に、谷川明男さんに写真を見せて、アシブトハエトリと確認。

2016年6月5日、アシブトハエトリを採集（滋賀県大津市大谷町）。空きビンで飼育することにした。エサにはハエ（肉バエ）を1週間に2匹ほど与えた。

6月22日に卵のうを確認。2～3日前から巣のようなものをつくりはじめていたが、卵を産んでいるのかどうか確認できなかった。22日になってクリーム色の卵塊が確認できた。

7月6日に卵のうの中に子グモを発見（図2）。子グモの脚らしきものが見えたので、この日か前日に孵化したものと思われる。

7月13日、子グモの姿をはっきり確認できた（図3）。

7月24日、子グモが出のう。子グモの数は



図2. 卵のうの糸はとても強いものだった（子グモを逃がしたときに確認）。



図3. 7月13日：卵のう内の子グモ（矢印）がはっきり確認できた。

7匹だった。アシブトハエトリに関する記述に、大和（1964）があるが、そこには卵の数は60個と記されている。今回の子グモの数は、卵数60個という報告とはかなりかけ離れている。2度目の産卵だったとも考えられるが、卵数の違いに関しては不明である。

7月25日、出のうした子グモを野外にリリースした。

8月11日、親グモはしばらく飼育していたが、死亡したので標本にした。

大和（1964）の報告では、木の葉を集めて住居を作るとあるが、空き瓶で飼育したため、その様子は確認できなかった。また、卵の数は60個と報告されているが、今回、正確に卵数を数えたわけではないが60個もなかったのは明白である。理由は分からない。

またアシブトハエトリを採集できたら、再度飼育して詳細に観察してみたい。

参考文献

大和昌久 1964. ハエトリグモ類の生態メモ. *Atypus*, 33/34: 27-28.

セミのぬけがらを利用するヤガタアリグモ

桂 孝 次 郎

筆者は大阪市西区の靱公園にてセミのぬけがら調べを大阪市立自然史博物館友の会で、1994年より毎年調べている。近年その調査時にアリグモが見つかることが多く、それらは赤っぽい小さなもので、タイクアリグモの幼体か？と思っていた。2016年9月11日に行われた「有志によるセミのぬけがら調査 2016」(図 1, 2)にて集められた抜け殻をビニール袋に入れて持ち帰り、数日後、袋上部に集まっているクモを多数発見した(図 3)。そのクモはほとんどがアリグモで総数 32 匹(うち成体が 3♂4♀, 幼体が 25 匹)、他にキハダカニグモの幼体が 1 匹、フクログモ類の幼体が 1 匹だった(図 4)。アリグモについて、今回、成体が見つかったので各部を精査したところ、♂の上顎と牙(図 4-c)および♀の生殖器(図 4-e)の形状からヤガタアリグモ *Myrmarachne elongata* Szombathy 1915 であると同定できたのでここに報告する。

ヤガタアリグモ(体長 4~6 mm)については靱公園では過去に記録がなく、大阪市内では大阪城公園にて多数が記録されている(加村 2008)。2007年の大阪府のクモ(池田 2007)には記録されていないことから、本種は近年外国から入ってきた外来種なのかもしれない。なおセミのぬけがらについてはクマゼミが 2,296 個体、アブラゼミが 1,115 個体で、それらは地面から 5 m 付近までの樹木の枝葉にくっついていたり、地面に落下していたものを一緒に袋に入れて集めた。靱公園のヤガタアリグモが、幼生時期にセミのぬけがらを利用していることは事実であるが、主に地面付近にいたのか？葉上にいたのか？は不明である。過去の靱公園の生態写真集を調べると、2016年4月3日と2016年11月13日に靱公園の「いのちの森」の中の木漏れ日があたる比較的広い葉上(シュロとユズリハ)(図 5, 6)で、日光浴に来る昆虫を待ち伏せている本種と思われる写真が見つかった。ヤガタアリグモは人間の手の届くくらいまでの、主に樹上性なのかもしれない。

おわりに

セミのぬけがら集めをしていただいた宮武頼夫・西川喜朗・白木江都子・六車恭子・三宅規子・松本吏樹郎・奥野晴三・竹本卓哉・梅岡宏史・柴田園江・川上弘子・吉村俊彦の各氏とヤガタアリグモの文献を送ってきていただいた追手門学院大学名誉教授の西川喜朗先生に心から感謝します。

参考文献

- 池田勇介 2007. 大阪府のクモ. くものいと, 40: 41-52.
加村隆英 2008. 大阪城公園のクモ類. 追手門学院創立 120 周年記念事業大阪城プロジェクト調査報告書「いのちの城・大阪城公園のいきもの」, pp.187-196.
Wanless, F. R. 1978. A revision of the spider genera *Belippo* and *Myrmarachne* (Araneae: Salticidae) in the Ethiopian region. Bulletin of the British Museum (Natural History) Zoology, 33(1): 1-139.



図 1. 韮公園に多いセミのぬけがら.



図 2. セミのぬけがら調べをしているところ.



図 3. 集めたセミのぬけがらと、袋上部に集まってきたアリグモたち.



図 5. 韮公園「いのちの森」の日のあたるシュロの葉上で日光浴に来る昆虫を待ち伏せているヤガタアリグモ (2016年4月3日撮影).

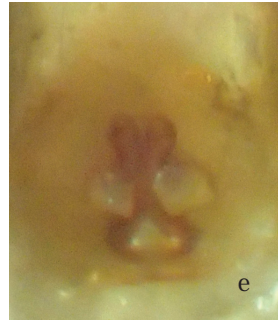


図 6. 韮公園「いのちの森」の中、日のあたるユズリハの葉上で日光浴に来る昆虫を待ち伏せているヤガタアリグモ (2016年11月13日撮影).

図 4. セミのぬけがらから出てきたアリグモたち.

a. 多数のアリグモ (a-1 キハダカニグモ, a-2 フクログモ類の幼体), b. ヤガタアリグモの♂, c. ヤガタアリグモ♂の上顎と牙, d. ヤガタアリグモの♀, e. ヤガタアリグモの♀生殖器.

高次元球の表面積や体積の求め方

山田 廣 士

クモの話題ではないのですが、同じ【理学】の分野ですからお許しください。

高次元の球の表面積や体積の求め方をご存じですか？ 順次に求める方法は簡単なのです（直接 n 次元の式を求めるのはガンマ関数を使うらしいですが）。ただ、それを相手に伝えるには受け手が 4 次元や 5 次元の球のイメージができないと難しいと、伝え方の相談に行った先生は仰っていました（私は必ずしも高次元立体のイメージができる必要はないと思うのですが）。

イメージとしては 2 次元の円をスライスすれば、縁（円周）は 2 端点、円（内充）は 2 端点を結ぶ直線となります、3 次元の球をスライスすれば、縁（球面=内空）は輪ができ、球（内充）は円（内充）ができます（リンゴを切った時の皮と実の関係）。ここまでは中高生はおろか、小学生でも理解できるでしょう。

では、4 次元は？ 2 次元、3 次元の考えの延長で良いのです。4 次元球をスライスすればその断面は 3 次元の球面、球になります。5 次元球をスライスすればその断面は 4 次元の球面、球になります。結論的に、球はスライスすれば断面は 1 次元低い球になります、イメージするのは簡単でしょ？

2 次元や 3 次元ならば、池の周りの等幅の道の面積とか、レールの左右の長さの差とか、穴の開いたリンゴの体積、欠球の表面積など速算的な面白い計算式がありますが、高次元球の式は何に使えるでしょうか？ 高次元球の式を利用してトンデモナイ証明ができれば面白いのですが！

さて本題ですが、(概念ですが) n 次元、超球 (1 次元でも 4 次元でも同じ言葉に統一) の縁 (周囲) の大きさ $\{=超表面積\}$ は 2 次元低い中身の大きさ $\{=超体積\}$ に $[2\pi r]$ を掛けた値、中身の大きさ $\{=超体積\}$ は、縁の大きさ $\{=超表面積\}$ に半径を掛け次元で割った $[r/n]$ を掛けた値です。その意味は中高生なら理解は容易だと思います。

前提として (簡単な例)、長方形の面積は幅×高さ；三角形の面積は底辺×高さ/2；角錐の体積は底面積×高さ/3 の意味が理解できるものとして。

0 次元		$V_0 = 1 \text{ (point) ;}$
1 次元	$S_1 = 2 \text{ (point) として}$	$V_1 = S_1 \times r/1 = 2r$
2 次元	$S_2 = V_0 \times 2\pi r = 2\pi r ;$	$V_2 = S_2 \times r/2 = \pi r^2$
3 次元	$S_3 = V_1 \times 2\pi r = 4\pi r^2 ;$	$V_3 = S_3 \times r/3 = 4/3\pi r^3$
4 次元	$S_4 = V_2 \times 2\pi r = 2\pi^2 r^3 ;$	$V_4 = S_4 \times r/4 = 1/2\pi^2 r^4$
5 次元	$S_5 = V_3 \times 2\pi r = 8/3\pi^2 r^4 ;$	$V_5 = S_5 \times r/5 = 8/15\pi^2 r^5$
6 次元	$S_6 = V_4 \times 2\pi r = \pi^3 r^5 ;$	$V_6 = S_6 \times r/6 = 1/6\pi^3 r^6$

(上記で S_2 は 2 次元球の表面積、つまり円周の長さ、 V_3 は 3 次元球の体積の記号と思ってください。)

結論として：次元毎に計算するには $S_n = V_{n-2} \times 2\pi r ; V_n = S_n \times r/n$ となる。

クモ網を採集するためのテクニック

船 曳 和 代

1. 基本的な方法

クモの網を採集するための基本的な方法は、これまでもあちこちで書いてきたが、改めてまとめてみたい。

用意するものは、黒やブルーなど濃い色の厚紙（光沢のあるものの方が仕上がりが美しい）、白とクリア2種類のスプレーラッカー、適当に薄めた水糊とスポンジ、これだけである。野外に出る時はハサミや筆記用具も持って行く方がよいが、網の採集には直接関係ない。

以下、採集したい網が決まったあとの作業を箇条書きにする。

- ① クモの体に軽く触れたり息を吹きかけたりして網からクモを除く。
- ② 網に白のスプレーラッカーを、むらのないように吹きつける。
- ③ 紙の表面にスポンジで水糊を薄く、均等に塗る。
- ④ 垂直に張られた網には後ろから、水平に張られているものには下から、紙をあてがう。
- ⑤ 紙からはみ出した糸をうしろへ巻きとるようにして切り、網を貼りつける。
- ⑥ 糊が乾いたら全体にクリアラッカーを吹きつける。

これが基本的な方法である。だが、この通りやってもなかなか上手くいかないものである。私が経験してきたなかで、こんなふうになれば美しい網が採集できるとか、この網はこんなやり方で採集しているとか、テクニックと言うほど大げさなものではないが、試みていることがいくつかある。クモのことや網のことにも少しふれながら、紹介したい。

2. 円網などの平面的な網

基本的には1に書いた通りにやればよい。

どの網でもそうだが、大事なことは1本1本の糸が、途中で切れずに紙の縁までつながっていることだ。特に円網は、円を作っている外側の枠糸が1本でも途中で切れてしまうと、たちまち網の形が崩れてしまう。全ての糸を、紙の縁できちんと切るように心掛けなければならない。またきちんと切ったつもりでも、乾かしているうちに中心へ向かって縮んでいくことがあるので、注意する必要がある。特に気をつけなければならないのは、ゴミグモ、マルゴミグモ、キジロオヒキグモなど、枠糸の強固な網だ。網の中身は毎日張り替えているから糸はすぐ切れるが、枠糸は補強しながらずっと使い続けているらしく、強くて太くて切れにくい。その上、弾力性に富む糸を、かなり強く引っぱって張っているようで、ようやく切って貼りつけたと思っても、中心へ向かってずるずると縮んでいくことがある。2カ所までだったら、乾くまで右手と左手の指で押さえおけばよいのだが、3カ所以上になると、どうしようもない。あつちを押さえたりこっちを押さえたりと、何本も手が欲しい。

水糊の場合、乾ききるまで時間がかかり接着力も弱いので、このようなトラブルが起こる。水糊の代わりにスプレー糊を使うと解決する。スプレー糊だと糸が紙に触れた瞬間にピタリと貼りついてしまい、ずれるということがほとんどない。ところがよいことばかりではない。まず、仕上がりが汚い。紙の表面がざらつき、でこぼこしてしまう。「標本」を作っているのだから、それでもよいといえばよいのだが、作るからにはやはりきれいなものを作りたい。また紙を網の後ろや下に差し入れている時に、誤って一部の糸が触れてしまうと即座に貼りついてしまい、採集できなくなる。長所すなわち短所である。乾いたようでいつまでも粘ついていて、直接重ねられないのも不便である。枠糸が強固な網を採る時は、今は2つの糊を組み合わせで使っている。表側には水糊を塗り、裏側に周囲約2センチ幅でスプレー糊を吹きつけておく。紙に網をあてがったあと、はみ出した余分な糸は紙の縁で裏側へ折り返し、スプレー糊を吹きつけた部分にしっかり接着する。縮みやすい枠糸もきちんと貼りつけておけば、糸が動くことはない。ただ裏側の糊はいつまでも粘ついているから、重ねる時には気をつけなければならない。

次にもう一つ、作品にリアリティをもたせるためにやっていることがあるので紹介したい。円網だけではないが、網には枯葉やゴミをつけたものがある。例えば、ハツリグモやヒメグモ

は、網の中に枯葉を吊るしているし、ゴミグモやマルゴミグモは、ゴミや卵のうをつけている。それをそのまま作品にするのだ。しかし、つけたまま採集しようとする、とてもやっかいである。台紙に接着された糸はクリアラッカーを吹きつけることによって紙と一体化し、手で触れてもこすっても、はがれるということはない。ところがゴミや枯葉は勿論、周りの浮いている糸は、触れると簡単にとれてしまうからだ。どのようにして解決しているのかというと、糊が乾かないうちに指先やピンセットで、浮いている糸を出来るだけ紙に接着させる。クリアラッカーを吹きつけた後もその作業を続ける。とにかく採集時点で、枯葉やゴミにつながっている糸を、1本でも多く紙に残すようにする。クリアラッカーが乾いたら、紙の間やクリアファイルにはさんで持ち帰る。改めてピンセットやヘラを使いながら、ボンドや木工用の糊でゴミや枯葉をきちんと貼りつけなおす。一つ一つが糸で綴り合わされているだけのゴミは、中へ糊を入れ固めてしまう。枯葉は押しつぶし、重なっている部分にも糊を入れる。こうすると軽く触れるくらいではとれなくなる。心配だったら全面に透明のシートをかけてやればよい。



図1. ナカムラオニグモの網。

今はこの手法を使って、網と一緒にいろいろなものを貼りつけている。例えばコガネグモダマシやジョロウグモの子グモの網を、ススキの枯れ穂や茎とともに貼りつけたり、クスマサラグモやツリサラグモの網を、ツタの蔓や枯れ枝と一緒に作品にしたりしている。特に鎌のように曲がったススキの枯れ穂は、利用しているクモも多く、楽しい作品ができる。ちょっと変わったものでは、全体にたくさんの小虫をつけたジョロウグモの網がある。秋によく見かけるもの



図2. ジョロウグモの網。

ので、私もいくつか採集した。無数の星が夜空に散らばっているような面白いものになった。同じ小虫でもアシナガグモの網につくと、横糸だけにしかつかないので、電線に雀が並んでいるように見える。たんぽぽ、のげし、あざみなどの綿毛をつけた網は、華やかで幻想的な美しさを秘めた作品になる。小虫も綿毛も数が多いので、ひとつひとつ貼りつけなおすのは大変である。こんな時はスプレー糊を使うのも一つの方法だし、網を張りつける時

の水糊を、濃いめにしてもよい。仕上げたものには透明のシートをかけてやる。状況によって糊を使い分けたり、組み合わせたりすればよい。

3. 立体的な網について

立体的な網の主なものには、サラグモの仲間が張る皿網、ヒメグモの仲間が張る不規則網、タナグモの仲間が張る棚網、スズミグモの仲間が張る絹網がある。これ以外にもコツブグモが張る球状円網や、ヤマジグモの張る立体円網など、いくつかある。またそれぞれの網も一様ではない。皿網を例にとると、平面に近いシート網、お椀を伏せたようなドーム網、逆向きのハンモック網の3つに分かれる。さらにドーム網は、なだらかな丘を思わせるものから深いキャップのようなものまである。ハンモック網の中にも、ハンモックそっくりのものもあるし、アリジゴクを連想するようなすり鉢型のものもある。一口に皿網と言ってもいろいろなのだ。

平面的な網は、線である糸によって直接描かれた比較的シンプルな形だ。立体的な網も、同じく糸によって作られているが、1本1本の糸が直接形を作っているのではない。無数に引かれた糸が、複雑に交錯しあいながら、一つの形を作り上げている。実際、肉眼で見ているだけでは、どれだけたくさんの糸が一つの網をドーム、あるいはハンモックという形に見せているのか、とても想像がつかないだろう。

ところが、白のスプレーラッカーを吹きつけてやると、見事に見えてくる。アシナガサラグモの網のドームを形作っている部分は、とくに糸が密集していて、まるでできたての綿あめのようだ。ドームを吊るように上へ伸びる糸も、前後左右へ引かれた糸も、半端な量ではない。すべてが一つになって、お椀を伏せたような半球形のなめらかなカーブを描きだしている。こんな網を目の前にすると、私はいつも胸の苦しくなるような感動を覚える。わずか数mmの小さなクモが、何回糸を引き出し、どれだけ行き来し、何度糸を留めればこんな網を作り上げることができるのか。おそらく気の遠くなるような作業だったに違いない。奪い取ってしまうのは、なんとも申し訳

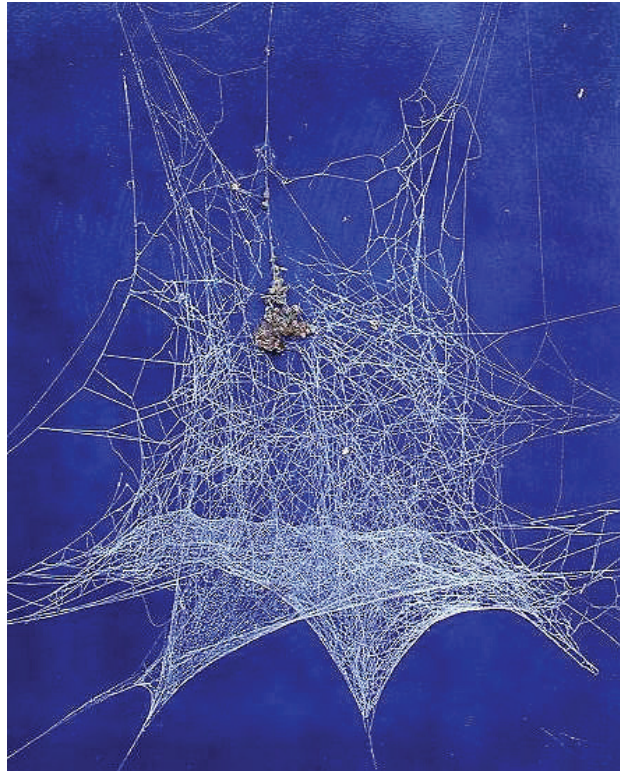


図3. ニホンヒメグモの網.

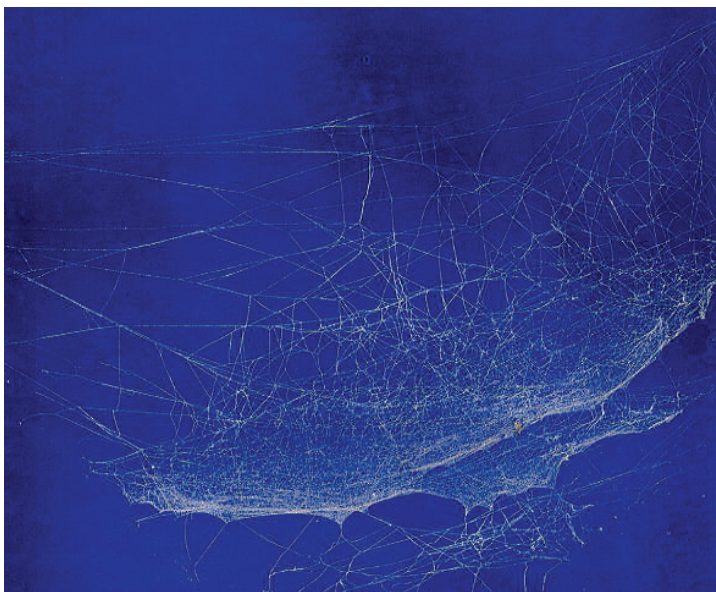


図4. クスマサラグモの網.

ない。

採集のためには立体的な網も、平面的な網と同じように網のうしろに紙を入れ、手前に動かして来なければならぬ。このためには、網の前後に葉や枝などの障害物が少ない、空いた空間に張られたものを見つけることが、特に重要になる。すなわち、立体的な網を採集するコツは、一も二もなく採集しやすい場所、採集できる位置に張られた網を見つけることだ。例えば、竹と竹の間、高さは地面から少し離れている所は理想的である。片方が竹や木の幹、もう一方が丈の低い雑木や草というのも比較的よい場所である。だが、こんな所に網を張っているのは、一部の種類の、その中でも、またごく一部のクモだけである。大部分は、灌木の茂みや草間、木の葉や枝の上や間など、とうてい紙が入るとは思われない場所だ。それでも、根気よく何度も山や野原を歩いて探し続ければ、「これなら採れる、これなら何とか採れそうだな」と思うような網に出合えるものである。

次に、具体的な採集方法を、アシナガサragモの、半球型のドーム網を例に書いてみたい。

まず、他の網を採集する時と同じで、クモを網から出す。立体的な網の場合は、クモに直接手でふれることができないので、息を吹きかけて出している。今のところこれしか思い浮かないのだが、クモは網の中を逃げ回るだけでなかなか外へ出てくれず、いつも苦勞している。何かよい方法があれば教えていただきたい。次に、白のスプレーラッカーを軽く吹きつける。これによって糸の伸びている方向や、枝や葉の、どこに留められているかを知ることができる。全体を見ながら、紙が入りやすいように、邪魔になる枝や葉を切る。後方へ伸びている糸もできるだけ切り、網のうしろを平にする。この作業によって半球型の網は、うしろ半分を切り取った形になる。切る糸によっては、カーブの形が大きく変わってしまうので気をつける。ラッカーの足りないところは吹きつけて足す。糊を塗った紙を網のうしろに挿し入れ、ゆっくり手前に動かしてくる。はみ出した糸は指先を使って紙の縁で切り、順次紙に貼りつけていく。終わりの方は紙の下を持ち上げ、すくうようにして全体を貼りつける。

立体的な網を、紙という平面に移し取るのだから、見ていた形と、貼りつけたあとでは、印象の異なることも多い。美しいと思った網が、採集してみるとそれほどでもなかったり、逆にそこそこだと思っていた網が、意外にきれいな形に採れたりする。紙のちょっとした持っつき方や、左右に伸びている糸の貼りつけ方によって大きく変わるのだ。「こうやれば必ず美しい形に採れる」という方法は、多分ないと思う。何度もやって、「これだ!」と思うような一つを採るしかない。

4. ヒラタグモとジグモの網や住居

ヒラタグモの網は受信糸網と呼ばれている。住居は糸の膜で作られた直径1~4 cmの白い円盤状の袋で、綿で作った円い敷布団と掛け布団を2枚重ねて張り合わせたような構造になっている。周りからは何本もの糸が壁を這って四方八方へ伸びている。これが受信糸と呼ばれる糸で、虫を捕らえる網の役目を果たしている。古い建物の壁や塀、石垣や樹木の表面に張りついている。

一方、ジグモの網は糸で編んだ管状の袋である。袋は樹木の幹や壁に沿って、地面から伸び出るように突き出している。地上に出ている部分は、2~3 cmと短いものから、10数cmのものまである。袋はそのまま地下部へと続いており、地上部と同じくらいの長さがある。狩りをする網として使用されるのは地上部だけで、地下部は食事をしたり、子育てをしたりする住居の役目を果たしている。



図5. ジグモの網。

ヒラタグモの網もジグモの網も樹木や壁にピタリと張りついているため、網のうしろに紙を入れて採集するという通常の方法は使えない。だからといって糊をつけた紙を前から押し当てても、ゴミがいっぱいついてくるだけだ。ではどうすればよいか。私は一度はがして改めて貼りつけ直すという方法をとっている。場所によっては無理かもしれないが、はがす前に白いラッカーを、少しだけ吹きつけておく。ヒラタグモの細い受信糸やジグモの土粒をつけた袋は、そのまま紙に貼りつけるとあまり目立たない。このあとピンセットを使って壁や幹からはがす。

ヒラタグモの場合、まず受信糸を、住居の方から外に向かって、切らないように気をつけながら1本1本はがしていく。3分の2ほど終わったところで止め、次に真ん中の住居へ移る。そしてまた、受信糸へと戻って作業を進め、すべての糸と住居をはがしてしまう。こんなふうにしたが、順序は別にどうでもよい。大切なのは、受信糸を1本でもたくさんつけて住居を採集することだ。集めたものは一つずつ別の箱や袋に入れて持ち帰る。糸同士はすぐにくっつき、まるまってしまうので、押さえたり一緒にしたりしない方がよい。帰宅後紙の上に広げて元の形にしていく。糊は工作用のものを、貼りつける部分だけにそのつどつける。最初に住居を、縁の糸を引き出しながら形を整えて貼りつける。次に受信糸を、放射状に伸ばして留めていく。気をつけて持ち帰ったつもりでも、ほとんどの受信糸は縮んでもつれている。慎重に切らないようにほどこき、適当な間隔を開けて貼りつけていく。

ジグモの方はずっと簡単だ。地上に出ている部分を、1~2 cm 下からはがす。ピンセットで少しずつはがしていけば、失敗することはほとんどない。袋についている砂粒や食べかすは、できるだけ残しておく。紙に貼りつける時の形をイメージして、長くて太い袋や短くて細いものなど、いくつか混ぜて採ってくる。それを紙の上にバランスよく配置して置いてみる。位置が決まったら袋の下に糊をつけて1本1本留めていく。砂粒や食べかすも落ちないように糊で塗り固める。どちらの作品にも透明シートをかけておく。

ヒラタグモやジグモの網や住居は、壁や幹からいったんはがして家へ持ち帰り、改めて紙に貼りつけている。まったく同じ形に復元することは無理だが、大切なのは元の姿に近づけながら、なおかつ美しい作品を作ることだと思っている。

5. オウギグモの扇網

クモに関心を持つまでは、網といえば円形だけだと思っていた。ところが驚いたことに扇網と呼ばれている三角形の網があったのだ。それはちょうど円い網を、中心を頂点にして30度から70度の角度で、縦糸に沿って切り取ってきたような網だった。さらにもっと驚いたのは、この網が角度も横糸の数もまちまちなのに、縦糸の数だけは見事に4本に統一されていたことだ。へそ曲がりな私は、同じようにへそ曲がりなクモがいて、縦糸が3本や5本の網を張っているかもしれない、と思って探し続けているが、今まで目にしたことはない。

クモは縦糸の集合点から枝や葉に向かって1本の糸を引き、その糸をたぐり寄せ、三角網を強く引っ張りながらとまっている。虫がそばを通ったり網に触れたりすると、たぐっていた糸をパッパッと小刻みに離して網糸をゆるめ、虫を絡め取っている。網を強く引っばっているのは、そばを通る虫の気配や触れた瞬間を、いち早く知るためだ。ところが、採集する時にはこれがじゃまになる。スプレーラッカーを吹きつけると、クモは虫がかかったと勘違いして、たぐっていた糸を離してしまうのだ。こうなるとたるんだり、糸同士がくっついたりして採集できなくなってしまう。クモがとまっているのは葉や枝のすぐそばだ。網を採集し始めたころは、縦糸の集合点とクモとの距離が、できるだけ開いているものを探した。それでもラッカーを吹きつけると、糸をゆるめてしまうことが多い。ある時、風が吹いて枝や葉が大きく揺れても、クモが反応しないことに気がついた。網に当たる風と虫の違いを、きちんと感じわけているのだ。“では、わざと枝や葉を動かして網を揺らしたあと、ラッカーを吹きつけたらどうするだろう。反応が少しは鈍るかもしれない”と思いついて、早速やってみた。網を揺らしたあとスプレーラッカーを吹きつける。また網を揺らして吹きつける。交互に何度か繰り返すのである。結構うまくいったが、なかには枝や葉に触れただけで糸を離してしまう敏感なクモもいるし、吹きつけと揺らしを繰り返している内に“やっぱり変だ”と思う猜疑心の強い(?)クモもいて、すべてが成功するわけではない。縦糸の集合点には特に念入りに吹きつける。少ないと肝心なところがぼやけ、気が抜けたような作品になってしまう。そこから引かれた糸は、少なくとも5~6 cm 残しておきたい。いくら網を揺らしたあとでもラッカーが体に直接かかると、す

ぐに糸をゆるめてしまうので、集合点とクモとの距離は、開いていれば開いているほどよい。採集する時に最初に切るのは、集合点から伸びているクモが引っぱっている糸だ。紙を当てると同時に親指と人差し指で押さえ、切って貼りつける。クモとのつながりを断っておかないと、作業中に網を緩められてしまう。あとはどれが先でも後でもかまわない。全ての糸を紙の縁で確実に留めることができれば、美しい作品ができる。ただ、糸はかなり強く引っぱられているため、留めたと思ってもずるずると動いてしまうことがある。こうなると、弓に矢をつがえて引き絞った時の、あの息詰まるような緊張感は消えてしまう。扇網の美しさの源は、緊張感にあるのだから、気をつけなければならない。

6. カラカラグモとオナガグモの網

その形からカラカラグモの網は、円錐形垂直円網と呼ばれ、オナガグモの網は条網と呼ばれている。形はまったく違うが、網の採集に関しては共通点がある。クモを取り除くと網が壊れてしまうから、残しておかなければならないことだ。

カラカラグモの網は正面から見ると垂直に張られた普通の円網だが、横から見ると円錐形をしていることが分かる。クモは円網の中心から直角あるいは斜めに糸を引き、その糸をたぐり寄せ、引っぱることによって円網を円錐形にしている。形が風にあおられて逆さになった傘に似ているので、傘状円網と呼ばれることもある。餌の捕らえ方はオウギグモとよく似ている。網に虫が近づいたり触れたりすると、たぐっていた糸をパッと離して網糸を緩め、絡めとってしまう。クモが獲物を待っているのは常に円錐の頂点ぎわで、頂点とクモの間にすき間がない。このことがカラカラグモの網の採集を難しくしている。クモを避けてスプレーラッカーを吹きつけることは不可能だし、体にスプレーラッカーがかかれば、たぐっていた糸を離してしまう。たぐっている糸を離せば、円錐形垂直円網はただの垂直円網になってしまう。円錐形の網をそのまま採集しようとすれば、糸をたぐった状態で、クモを固めてしまわなければならない。何かあればすぐに反応しようと待ちかまえているクモに向かってスプレーラッカーを吹きつけ、糸を離す前に固めてしまおうというのだから、至難の業である。どうすれば確実にできるのか、いまだに分からない。とりあえず至近距離で、一気に大量のスプレーラッカーを吹きつけて、身動きできない状態にすることにした。けれども、近寄るだけで勘づくクモがいる上に、吹きつけた瞬間には90パーセント以上が糸を離してしまう。最初の一吹きはなんとかクリアできても、必要な量を吹きつけている間にほぼ全部のクモが動き出す。ということで、何回となく試みたが、円錐形のまま採集できたのは2回だけである。成功率は1~2パーセント、失敗しても多分クモは死んでしまうだろう。なんとも残酷なことをしているようで気がひける。

オナガグモの網も、カラカラグモの網と同じ方法で採集している。オナガグモの場合はこの方法が半分くらいは成功する。特に子グモの網は確率が高い。ただあまり小さいと糸が弱いので、吹きつけた瞬間、網が吹っ飛んでしまうこともある。

いずれにせよ、どちらも網を採集するためにはクモを殺さなければならない。犠牲は最小限にとどめたいから、なんとかよい方法がないだろうかと考えている。せめて60~70パーセントは成功するような……。

7. ネコハグモの網

ネコハグモは広葉樹の葉上だけでなく、建物の壁や窓枠、フェンスや塀など、人工物にもたくさん住んでいる。けれども私が採集しているのは葉の上に張られた網だけなので、それに限って話を進めたい。

4月の末から6月にかけて卵のうから出てくる子グモは、サクラやウメ、モクレンといったやわらかい新葉の上に次々と住みつく。内側に反った葉が大好きで、縁から縁へ糸をかけて下にひそんでいる。幾重にもかけられた糸は白くてよく目立ち、見るたびに「葉が包帯をまいているようだ」と思う。クモの成長とともに網も変わり、やがて天幕状の屋根をつけるようになる。目にはほとんど見えないが、葉の上にも毛足の長いジュータンを敷きつめたように、たくさんの糸が張りめぐらされており、うっかり止まった虫はつかまってしまう。

包帯をまいた網も天幕状の屋根をつけた網も小さな葉の上に張られているので、普通のやり方では採集できない。ヒラタグモのように一旦はがして改めて貼りつける方法も、敷きつめられた糸まで復元することは不可能である。どうするのかというと、網のついた葉を紙に押しつ

けて貼りつけるのだ。出来上がったものは、元の網を裏から見たものになるが、形はほぼ同じである。

具体的な方法としては、まず、網が張られた葉をとってきて中にいるクモを、息を吹きかけたり、爪楊枝で網を傷つけないようにつついたりして追い出す。次に新聞紙の上に置き、白のスプレーラッカーを軽く吹きつける。少し離れたところから、そして、たくさん吹きつけないのがコツである。台紙に工作用の糊を葉の形に塗り、その上に網の張られている方を下にして葉を置き、重石を載せて2~3時間おく。少し乾いたところで網糸が紙に移っていることを確認しながら、柄の部分からそろそろとはがしていく。まだ葉の方にくっついている糸は、ピンセットを使って紙に移して貼りつける。包帯や天幕の糸は葉に特別強く留められているらしく、なかなか離れないので細かな作業が必要になる。網を紙に確実に貼りつけるには、糊が完全に乾いてからの方がよいように思うが、乾いてしまうと網糸だけでなく、葉についた余分なスプレーラッカーの色まで紙に移してしまうことが多い。またピンセットではがした糸を貼りつけるために、いちいち糊をつけなければならないので、かえってやりにくい。ほどほどに乾いた時がよいのだが、ほどほどを具体的に説明するのはむずかしい。いくつかやってみるうちに、なんとなく分かってくるのではないだろうか。

8. トリノフンダマシたちの網

漢字を当てれば「鳥の糞騙し」である。名前から想像すると、どんなひどい姿をしているのか、と思うようなクモだが、実際はとてもきれいだ。腹部はふっくらしたハート形。表面に毛はほとんどなく、つるつるして光沢がある。色や柄も豊富で、目玉紋があるものもいたり、黒と赤のツートンカラーのものもいたり、白い帯のあるものもいたりする。中にはテントウムシそっくりのクモもいる。どれもがペンダントにして首からぶら下げても十分通用するほど可愛い。クモの観察会や採集会では人気者で、見つかるとう盛り上がる。

この仲間が張る水平円網は非常に網目が粗く、直径が1mに達するような網でさえ、縦糸の数も横糸の数も10本前後しかない。縦糸が100本近くもあるギンメッキゴミグモの網や、レコード盤に例えられるほど横糸が多いゲホウグモの網に比べると、えらい違いである。

水平円網なら採集は簡単だ、と思われるかもしれない。だが、二つの理由からとても難しい。一つは夜にしか網がないことだ。トリノフンダマシたちは辺りが暗くなるころに活動を始め、網を張って虫を捕らえる。網は夜明けになると片付けてしまい、昼間は木や草の葉裏に静止している。採集は網のある夜間にやらなければならないのだが、夜は日中と違って暗く、網を見つけない。効率をよくするためには、あらかじめ昼間にクモがいる場所やいそうな場所を見つけておく。近くに水辺があるような草原や河原、周辺の樹林地がねらいめで、ススキが生えていれば葉裏を探すとよく見つかる。サイズの大きい網はとりにくいから、比較的小さな網を張るシロオビトリノフンダマシやアカイロトリノフンダマシを見つけるとよい。ただ全てが同じような環境を好むから、一つの種類が見つかったら、別の種類もいることが多い。

出かけるのは午後8時ごろがよい。あまり早いとまだ張っていないことがあり、遅いと虫がかかって破れているものが多くなる。懐中電灯であちらこちら照らしながら探して歩く。光の中にはさまざまな網が浮かび上がってくるが、トリノフンダマシたちの網には、はっきりした特徴がある。傾きはほぼ水平。大きく間隔を開け、ゆったりと下にたわむように張られた7~8本の横糸だけが白く、くっきりと光って見える。しかも横糸はつながって見えず、まるで星の軌跡を記録した映像のように途中でプツプツと切れている。横糸が縦糸と交差するあたりに粘球をつけない。光って見えるのは粘球だから、その部分や縦糸は光を受けても見えないのだ。さらに粘球は他のクモよりもずっと大きいので、一段と強く輝いて見える。

採集できそうな網を見つけると、クモを逃がしてやり、白のスプレーラッカーを吹きつける。ここで二つ目の困難に直面する。至近距離で吹きつけたわけでも強く吹きつけたわけでもないのに、横糸の片方が縦糸についていた辺りで次々と切れてしまうのだ。片方は切れても、もう一方はつながっているから、まるで「つらら」のようになってぶら下がってしまう。トリノフンダマシたちは夜に活動する蛾をターゲットに狩りをしている。ところが、鱗粉の多い蛾は、服を何枚も重ね着しているような生き物だ。網にかかっても、上着だけ脱ぎ捨てていくように、鱗粉だけ残して飛び去ってしまうことが多い。逃がさないために、横糸には蛾がかかると片方

が自動的に切れる仕掛けがほどこされている。クモにとっては、蛾を確実に捕獲するための仕掛けかもしれないが、網を採集する私にとっては最悪のものだ。きれいな網を見つけてうまくクモを追いつけても、スプレーラッカーを吹きつけるという段階で失敗してしまう。といて切れることを恐れて吹きつけを控えると、糸はほとんど着色されず、薄くて目立たない。あともう少し、もう一吹き、とやっているうちに“つらら”が増えていき、採集不能になってしまう。ということで、未だに完全なものを手に入れることができない。まあものは考えようで、“つらら”のまじった作品はトリノフンダマシ仲間の網らしくて味があり、面白いのではないだろうか。

9. ヒザブトヒメグモの住居と網

砂や土でできた釣鐘状の住居と、中からフレイスカーツのように広がる糸の束。網は住居を含めても天地 10 cm 前後しかないが、とても魅力的な形をしている。

住んでいるのは崖地の窪みや石垣の間、樹木の根元付近など、狭い空間である。クモは天井から 1 本の丈夫な糸を引き下ろし、土や砂粒で釣鐘状の住居をつくっている。中からたくさんの糸を地面に向かって引いていて、これが網の部分にあたる。糸の先に小さな粘球をつけ、地面との接合点は切れやすいように作ってある。這ってきた虫が粘球に触れると、地面に接している部分が切れて宙づりになる。そこへすかさず近づき、糸を投げかけてからめとってしまおうという作戦なのだ。

網を探す時は、糸はほとんど見えないので、天井からぶら下がっている釣鐘状の住居を探すとよい。採集のためには網の後ろに紙を入れ、指先で手前へ移動して来なければならない。それが可能な空間に張られているものを見つける。また迫力のある作品を作るためには、住居と網を含めた全長が長いものを見つけることも大事である。現場へは小さめの紙とハサミを持って行く。採集できそうな網を見つけたら、すき間に入るように合わせて紙を切る。クモは釣鐘の中にいるので逃がさずに、白のスプレーラッカーを吹きつける。至近距離で強く吹きつけると糸は地面との接合点で切れてしまうので、離れたところから少しずつ吹きつける。紙に水糊を塗って網の後ろへ挿し入れ、まず釣鐘の上の糸を紙に密着して切る。糸は非常に強いので切れにくい。切れない時は指で押さえたまま、紙を手前へ動かしながら持ち上げ、先に下の部分を、すくい取るようにして貼りつける。そのあとで、上の糸を、指でおさえたまま引っぱって切る。こんなふうにしたが、指先がやっと入るかはわからないかという狭い空間での作業なので、なかなかうまくいかない。網糸は比較的素直に紙に接着してくれるが、上の糸と釣鐘はすぐに紙から浮いてしまう。両方は強固に結ばれているために、ややもすると網糸は釣鐘の下で切れてしまう。こんな場合でも、網糸さえきちんと貼りつけておけば、あとで修復できる。水糊が乾くまでの間に釣鐘の住居を指先で軽く押さえると、クモが這い込んできて逃がしてやる。浮いている糸を指先やピンセットで紙に密着させ、乾かしてからクリアラッカーを吹きつける。クリアシートに挿みこんで持ち帰り、砂粒や土は改めて木工用のボンドや糊で、バラけないように貼りつける。上の糸もきちんと留めておく。

スプレー糊を使うと接着度は高まるが、ボロボロと落ちてくる土や砂まで一緒に貼りついてしまうから汚くなる。両方使ってみて自分に合ったものを見つけて欲しい。作品には透明のシートをかけておく方がよい。

10. 隠れ帯について

隠れ帯というのは円網についている飾りのことだ。普通は網の真ん中あたりにあって、形は渦巻き状、円盤状、直線状、X状、それを組み合わせたものなど、バラエティにとんでいる。野外では網糸は目立たないが、隠れ帯は、真っ白でよく目立つ。

なぜこのようなものをつけるのか。自分の姿をカムフラージュするため、網を目立たせて鳥などの動物に破られないようにするため、網を補強するため、網の不具合を調整するため、餌の虫を引きつけるためなど、いろいろ言われている。形はクモによって決まっている。それが一つだけということもあるが、ナガコガネグモのように子供の時と大人になってからでは違うものもあるし、カタハリウズグモのように同じクモでも“お腹がすいているか、一杯か”などの状況によって変化することもある。こんな隠れ帯ばかりを集めて作品にすれば、また少し趣の変わったものができる。

隠れ帯だけを採集する時は、あまり大きな紙はいらない。せいぜい10~15 cm 四方のものでよい。同じサイズのをたくさん用意して、クリアブックと一緒に持って行く。採集は面白い形のものが見つかったらその都度してもよいが、私はたいてい「今日は〇〇グモの隠れ帯を集めよう」と、決めて出かける。例えば、ナガコガネグモのものは、7月初めから中旬にかけて、河原や草原に行つて集中的に集める。このクモの場合、幼体時代の形はジグザグの渦巻状である。成長とともに変化して、やがて縦一本の直線状になる。子グモが卵のうから出てくるのは6月初めだが、網はまだ小さい。7月半ばになると、網も大きくなり、隠れ帯も直線状のものと渦巻き状のものが混在する。両方の形が集められるので、時期的には丁度よい。クモはいる所にはいくらでもいるから、選り取りみどりである。

採集の仕方は普通の網とは少し異なる。まず、網に白のラッカーは吹きつけない。吹きつけると網糸すべてが白くなり、隠れ帯が目立たなくなってしまう。次に、糊は紙全体ではなく周囲にだけ塗る。そして、乾いてもクリアラッカーを吹きつけない。直接糊で貼りつけたり、クリアラッカーを吹きつけたりすると、なぜか隠れ帯の糸の白さが目立たなくなってしまうのだ。採集したものは、周りを動かないように留めているだけだから、触れたりこすったりするとすぐにとれてしまう。糊が乾いたら重ねずに、一枚一枚クリアブックにはさみこんでおく。網全体の場合は、あとから見ても何となく上下が分かるが、隠れ帯だけでは判断がつかないことが多い。採集した時、ウズグモのような平面的な網は別として、クモの名前とともにどちらが上か、必ず書いておく。

作品を作る際には、種類に関係なくいろいろな形のを並べてもよいし、ナガコガネグモならナガコガネグモのものばかり、ギンナガゴミグモならギンナガゴミグモのものばかりというように、同種の中での変化を見せても面白い。隠れ帯を並べて見ていると、さまざまな形はクモの気持ちを反映しているのではないか、と思えてくる。渦巻きからは「おなかすいているのかな」と思ったり、太い大きな×印には「全てを拒否して引きこもっているのだな」と感じたり、鋭角の線の組み合わせには、「腹を立てているのではないか」と考えたりする。勿論、私の勝手な想像である。だが、隠れ帯をとおして、いつかクモと心が通じあえる日がくるかもしれない、などと夢のようなことを考えている。

以上、私が網を採集する時に実行している具体的な方法です。興味のある方は参考にしてください。



図6. クロガケジグモの網.

セアカゴケグモの咬傷例

西川 喜朗

筆者は、日頃からセアカゴケグモ *Latrodectus hasselti* の採集や調査の協力をしていただいている知人の Y さん（茨木市在住）が、このクモにかまれたという事を聞いたので、その経過を報告する。

毒グモのセアカゴケグモ（ヒメグモ科）は、1995 年秋から大阪府をはじめ、おもに西日本各地から発見され、現在では 43 都道府県から発見記録や採集記録があり、咬傷例は 84 例がある（ゴケグモ情報センター 2016）。しかしながら、死亡例はなく、抗血清の投与が必要な重篤な症状のものもない。咬傷の報告は多数あるものの、具体例の報告は少ない（緒方 1997; 池田 2006）。

Y さんがセアカゴケグモに咬まれた時の様子は以下のとおりである。Y さんは、大阪府茨木市在住、59 才の男性、体重約 55 キロ、スポーツマンタイプの活動的な人である。

<咬傷例>

2016 年 9 月 14 日午後 5 時ごろ、大阪府吹田市北部のある施設の敷地内で、屋外の鉄製の架台のコの字型に下向きに開いている水平のさの隅（図 1）に、セアカゴケグモの住居（巣）とその中にあるクモを見つけたので、長さ約 20 cm の小枝をひろって、右手で巣の中のクモをかき出して落とした。ところが、クモが地面に落ちていない、と思っていると、突然右手に「チクリ」と痛みを感じた。手を見ると親指の背面にクモがついていたので、すぐに振り落した。地面に落ちたクモは足を縮めて死にまねをしていた。すぐに持っていたプラスチックのピンにそのクモを捕獲した。

咬まれた場所は右手親指の第 1 関節付近で、傷あとではなく、正確な場所はわからなかったが、その付近を押さえると痛みを感じる程度であった。痛みは 1 日中続いたが、はれることもなく手指の屈伸運動も普通におこなうことができた。日常生活はすべて普段通りにできた。就寝前には右手の脇の下のリンパ腺のあたりに少し違和感がした。2 日目の夕方には痛みはほぼおさまり、3 日目には完治した。この間、特別の医療行為は行っていない。痛みの強さは、アシナガバチに刺された時の半分ぐらいの痛さだった。このセアカゴケグモは体長 5 mm の雌の幼生だった。

路上に落としたはずのクモは、小枝の先にしがみついていたか、糸にぶら下がっていて、素早く小枝を伝って、Y さんの手まで来て咬んだと思われる。

<まとめと考察>

今回の Y さんが感じた、セアカゴケグモに咬まれたことによる痛みは、緒方(1997)や池田(2006)の報告に比べるとかなりゆるい。

これは、クモが幼生であったので毒性が低かったのか、毒液の量が少なかったのか、Y さんの体力があったからか、などが考えられる。

しばしば、ゴケグモ類は「攻撃性はない」と言われるが、これは、特別の刺激を与えない限りクモから人に向かって来て咬む（攻撃する）ことはない、ということであって、すべてのクモについて言えることでもある。ところが、セアカゴケグモは迷惑な刺激に対しては、逃げる一方ではなく、逃げる途中で相手に「チクリ」と一撃を与える（咬みつく）ことが多いようだ（緒方 1997 ; 池田

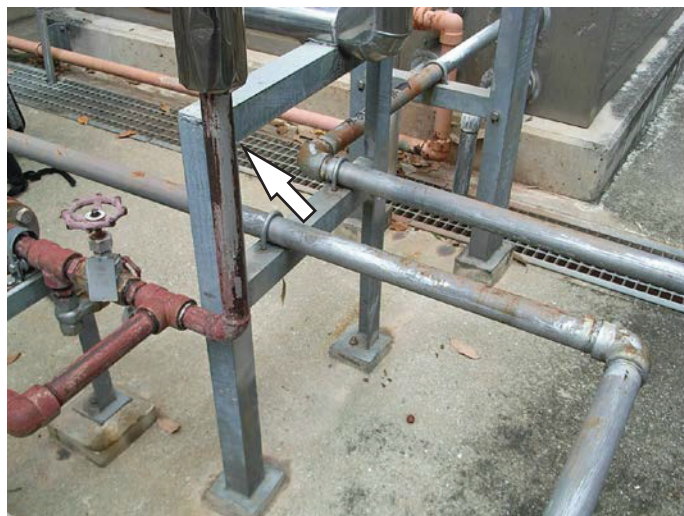


図 1. セアカゴケグモがいたところ。

2006). そういう意味では「不愉快な刺激を受けた時には攻撃性がある」ということもできる。

<おわりに>

セアカゴケグモの生態は周知のことだが、最近よく見つかる場所は、日当たりのよい所の側溝のふた（コンクリートブロックやグレーチングと言われる鉄格子など）の裏側、水抜き穴の中、駐車場などに置いてある赤色の円錐形のコーンの中、プランターの縁の折り返しの裏、石垣や階段の隙間、墓石の狭い隙間などで、その住居（巣）には必ず枯れ葉などのゴミをつけている。住居の糸は他のクモの糸と比べて明らかに強い。住居から地表まで複雑な網を張っている。

公園のベンチや石段に座ったり、側溝のそばに荷物を置いたりするときは、その近くにゴミのついたクモの巣がないことの確認を心掛けるべきである。また、駆除するときは、小さな子グモを見失うおそれがあるので、風のない日が良い。

おわりに、貴重な情報をいただいた Y さんと資料の教示をいただいた清水裕行さんに深く感謝します。

参考文献

- 池田勇介 2006. セアカゴケグモに咬まれて. くものいと, (39): 47-49.
 緒方清人 1997. セアカゴケグモ (*Latrodectus hasseltii*) に咬まれる. 蜘蛛, (29): 18-20.
 ゴケグモ情報センター 2016. 昆虫情報処理研究会のサイト <http://www.insbase.ac/xoops2/modules/bwiki/> (2016/12/13 検索)
 清水裕行・金沢至・西川喜朗 2012. 毒グモ騒動の真実 -セアカゴケグモの侵入と拡散-. 197 pp. 全国農村教育協会, 東京.
 西川喜朗 1995. 毒グモに注意! セアカゴケグモが大阪に上陸. Nature Study, 41(12): 11-12.



大阪市立大学理学部附属植物園のクモ（追加）

西川喜朗・赤松史憲

筆者の一人西川は、私市（きさいち）にある大阪市立大学理学部附属植物園（大阪府交野市私市）のクモ相の調査を小池直樹氏とともにおこなって、126 種の目録とワスレナグモ（本文中に記録）の計 127 種を報告した（西川・小池 2014）。その後あらたに 10 種のクモが確認できたので報告する。この植物園の南東側は生駒山系と連続し、標高 40~120 m の起伏に富んだ地形で、面積約 25.5 ha である。なお、園内はすべて採集禁止である。

本報告にあたり、貴重な調査結果の提供をいただいた嶋澤聡氏に厚く感謝します。そして、調査にご協力いただいた福武淑子、加村隆英、市立大学生物研究会、かたの環境講座の参加者のみなさんに感謝します。

コガネグモ科

ハツリグモ	2 exs 目撃 (2016/10/29, 赤松史憲・西川喜朗)
ヤエンオニグモ (?)	1 ♀ 写真 (2016/04/02, 嶋澤聡)
シマゴミグモ	1 ex 目撃 (2016/10/29, 赤松・西川)
トリノフンダマシ	卵のう 目撃 写真 (2016/11/06, 嶋澤)
オオトリノフンダマシ	卵のう 目撃 写真 (2016/10/29, 嶋澤), 1 ♀ 目撃 写真 (2016/10/29, 嶋澤)
アカイロトリノフンダマシ	1 ♀ 目撃 写真 (2016/07/10, 嶋澤)
サガオニグモ	1 ex 目撃 (2016/10/29, 嶋澤)

マメイタイセキグモ 1♀ 目撃 写真 (2016/07/16, 07/23, 嶋澤), 卵のう 写真 (2016/07/30, 08/12, 08/27, 09/09), 卵のう 目撃 写真 (2016/10/29, 嶋澤・西川・赤松)
ゴマジロオニグモ 1♀ (2015/09/29, 加村隆英・大阪市立大学生物研究会)

ハグモ科

ネコハグモ 多数 目撃 (2016/10/17, 西川・福武淑子)

引用文献

西川喜朗・小池直樹 2014. 市民参加で調べたクモ相の多様性 (pp.153-168), 大阪市立大学理学部附属植物園クモ目録 (pp.339-349). In: 植松千代美 (編), 都市・森・人をつなぐ. 京都大学学術出版会 (京都), 370 pp.



クモの観察会用のプリント

西川喜朗

わたしは2010年頃から、クモの採集会や観察会の世話係、あるいはゴケグモの説明会の講師として、クモ類の話をするときには、つぎのようなプリントを用意していきます (次ページ参照)。とりあえず、このプリント1枚があれば、クモのことはなんでも話題をひろげることができて、ひととおりの説明ができるので愛用しています。本会のみなさんもそのような時には、いろんな資料の工夫をされていると思いますが、私が使っているものの一例を紹介します。

観察会や講演会の目的や参加者の顔ぶれに応じて、話す内容も変わります。たとえば、洞窟や夜の観察のときには、「網を張るクモは糸の振動に敏感だが視力は弱い。真っ暗闇でも餌をとることが出来るので、暗黒の洞窟内では食物連鎖の頂点にあたる。」「クモは糸を使って空中に静止するのはなぜだろう？ ちょっと考えてみてください。」「餌をとることより、敵に食べられないように逃げるの方がもっと大切 (と、私は思っている・・・)。下向きの方が敵から逃げやすい？」「オスがメスに下手に近づくと、餌と間違われて食べられそうです。あなたがクモのオスなら、食べられないためには、どのようにメスに近づきますか？ どんな合図が、どのような挨拶がいいやろうか？」などなど・・・。

このプリントとあわせて、クモの全形図を「日本産土壌動物」(青木 編著 1999) から一部分を改変したものと、クモ形類の系統樹を「学研の図鑑・クモ」(松本・新海・小野 1976) を改変して縮小し、A4の1枚にまとめたものも使い勝手がよい。さらに、加村さんと作ったクモの網のいろいろ (13例) や70種あまりのクモの図を添えることもあります。けれども、ウズグモ、オナガグモ、ゴミグモ、トリノフンダマシ、アリグモ類たちの出現に勝るものはありません。

「クモの網のパネル作り」も、野外でやると大変喜んでもらえます。船曳さんが作成されたプリントの方法どおりにやると、実にうまく出来ます。はじめは失敗することがあっても、やり直しができるし、1本のたて糸の固定がゆるんだ程度の失敗なら、一連の作業の解説と失敗談の話ができるので、それなりに楽しいものです。

このプリントの表題は、「クモとはどんな動物か」とか「ゴケグモ類とはどんな動物か」と、目的に応じて適当につけ変えています。これらの採集会や観察会を通じて、1人でも多くのクモ好きができればと願っています。

文献

青木淳一 (編著) 1999. 日本産土壌動物 一分類のための図解解説一. 東海大学出版会, xxxix+1076 pp.
松本誠治・新海栄一・小野展嗣 1976. 学研の図鑑・クモ. 学習研究社, 160 pp.

セアカゴケグモとはどんな動物か

(2017/02/22 改, 西川喜朗)

節足動物門	クモ形綱(8本足)	クモ目	ヒメグモ科	ゴケグモ属	(種)
原生動物	三葉虫	ダニ	キムラグモ	イソウロウグモ	セアカゴケグモ
環形動物	剣尾類	ザトウムシ	ジグモ	コガネヒメグモ	ハイイロゴケグモ
軟体動物	多足類	サソリ	トタテグモ	ミジングモ	アカオビゴケグモ
棘皮動物	甲殻類	ヤイトムシ	サラグモ	ヒシガタグモ	クロゴケグモ
脊椎動物	など	ウデムシ	コガネグモ	ヒメグモ	
など		など	コモリグモ		
			タナグモ		
			カニグモ		
			ハエトリグモ など		

種類数	世界のクモ	115科, 約40,000種
	日本のクモ	65科, 約1,500種 (52科, 1,200種)
	・1都道府県のクモ	400~600種
	・1つの山, 地域のクモ	120~170種

クモの特徴

- ・クモは肉食, 糸にかかった虫ならなんでも食べる.
口外消化, 餌の虫がしびれる毒液(消化液)を牙の先から出す.
- ・昆虫のような変態はしない.
 体は頭胸部と腹部, 細くくびれる. 脚4対. 触肢1対. 腹部に体節がない.
- ・成虫(成体)になるまでに, 数回の脱皮をする.
 ふつうは1年に1化. 脱皮は, 数回(~8回, 10回)で成虫になる.
- ・造網性と徘徊性(昼行性, 視力が良い)の種がある.
- ・糸いぼから糸を出す. しおり糸, 色んな網や巣などに使う.
 小さいときに糸を出して飛ぶ(バルーニングをする)ものが多い.
- ・卵は糸で包む, 卵のう内には, 卵が数10個~200個ほど入っている.
- ・メスの生殖器は外雌器(腹部うらの前方), オスの生殖器は触肢の先にある.
 交尾は間接的で, 交接という.
- ・交尾前のディスプレイ. 餌とまちがわれないように.

○セアカゴケグモの特徴○

(腹の裏に砂時計もよう. 糸が強い, 巣にゴミを付けている. 明るい所の物陰.)

京都府京都市におけるヒトエグモの生息分布調査

藤野 義人

1. はじめに

ヒトエグモ *Plator nipponicus* (Kishida 1914) は、ヒトエグモ科ヒトエグモ属のクモである。「単衣蜘蛛」と記す通り、全クモ類中最も扁平な形態をしており、古い神社や寺院、旧家の屋内の壁の隙間や柱と板の隙間、屋外では石造物の隙間や大木の樹皮の下などに身を潜めて生活をしている。日本では、京都府、大阪府、奈良県、兵庫県、静岡県で採集または確認されているが、発見例、採集例が少なく情報不足の地域が多い。筆者は、2001年2月に京都市東山区の市立一橋小学校でヒトエグモを発見して以来2017年1月まで、京都市内を中心に各地で生息調査を行ってきた。その結果、京都市内の全区で生息を確認したので報告する。

2. 研究方法

- (1) 調査期間 2004年10月～2017年1月
- (2) 調査地域 京都府京都市の全11区(中京区, 上京区, 下京区, 右京区, 左京区, 東山区, 西京区, 南区, 北区, 伏見区, 山科区)
- (3) 調査方法
 - ① 調査地 調査地域に所在する古い神社や寺院, 旧家など114か所で調査を行った(表1)。

表1. ヒトエグモの生息分布調査における調査地。

番号	調査地	番号	調査地	番号	調査地
1	右京区梅宮大社	39	左京区聖護院五大力積善院	77	東山区瀧尾神社
2	右京区春日神社	40	左京区須賀神社	78	東山区智恩院
3	右京区清涼寺釈迦堂	41	左京区八神社	79	東山区智積院
4	右京区二尊院	42	左京区古知谷弥陀寺	80	東山区東福寺五社大明神
5	右京区仁和寺御影堂	43	左京区吉田神社諸社	81	東山区満足稲荷神社
6	右京区平野神社	44	下京区興正寺	82	東山区八坂神社全域
7	右京区松尾大社	45	下京区菅大臣神社	83	東山区安井金比羅絵馬堂
8	上京区上御霊神社	46	下京区東寺	84	東山区豊國神社
9	上京区鳥丸天満宮	47	下京区西本願寺	85	東山区若宮八幡宮
10	上京区北野天満宮	48	下京区目吉社	86	伏見区石田社の神社
11	上京区京都御苑・宗像・白雲神社	49	下京区伏見稲荷大社	87	伏見区小栗栖八幡宮
12	上京区護王神社	50	下京区仏光寺	88	伏見区金札宮
13	上京区下御霊神社	51	下京区若宮一神社	89	伏見区御香宮
14	上京区白峯神社	52	中京区御金神社	90	伏見区城南宮
15	上京区清明神社	53	中京区革堂	91	伏見区城南宮・芹川神社
16	上京区大将軍八神社	54	中京区空也堂西稲荷神社	92	伏見区醍醐三寶院
17	上京区梨木神社	55	中京区三森稲荷	93	伏見区醍醐随心院
18	上京区文子天満宮	56	中京区高松神明社	94	伏見区乃木神社
19	上京区本法寺	57	中京区錦天満宮	95	伏見区羽束師神社
20	上京区水火天満宮	58	中京区白山神社	96	伏見区東土川倉掛神社
21	上京区妙顕寺	59	中京区本能寺	97	伏見区藤森神社
22	上京区靈光殿天満宮	60	中京区六角堂	98	伏見区伏見稲荷大社
23	北区今宮神社	61	西京区大蔵神社	99	伏見区三栖神社
24	北区上賀茂神社	62	西京区大原野神社	100	伏見区横大路飛鳥神社
25	北区貴船神社	63	西京区榎本神社	101	伏見区横大路田中神社
26	北区区久我神社	64	西京区善峯寺各堂	102	伏見区淀神社
27	北区建勲神社	65	西京区松尾大社	103	伏見区淀水垂天満宮
28	北区総神社	66	東山区一橋小学校区民家	104	伏見区六地藏大善寺
29	北区大徳寺	67	東山区一橋小学校	105	南区吉祥院天満宮
30	北区久我神社	68	東山区大谷本廟	106	南区恋塚寺(恵光山淨禪寺)
31	左京区大原三千院	69	東山区戒光寺墓地	107	南区新宮神社
32	左京区大豊神社	70	東山区清水寺全域	108	南区六孫王神社
33	左京区岡崎神社	71	東山区高台寺	109	山科区岩屋神社
34	左京区貴船神社	72	東山区三十三間南大門	110	山科区折上稲荷社
35	左京区貴船神社奥の院	73	東山区新熊野神社	111	山科区大石神社
36	左京区熊野神社	74	東山区新日吉神社	112	山科区勸修寺
37	左京区鞍馬寺	75	東山区即成院	113	山科区毘沙門堂
38	左京区鞍馬由岐神社	76	東山区大将軍神社	114	山科区山科神社

② 調査場所, 採集方法

古い神社や寺院, 旧家の屋内では, 壁の隙間, 柱や板の隙間, 置物の下などを調査した. 屋外では, 木造建造物の柱や板の隙間, 石垣や灯籠, 墓石, 屋根瓦などの隙間, 大木の樹皮下などを調査した (図 1). 採集には図 2 に示す道具を用いた. 隙間の調査には, ヘッドライトを用い, 隙間を覗き込み目視でクモを確認した. 採集可能な場合には薄く削った竹串などを用いてクモを追い出し採集した (図 3 左). 採集した個体は, 計測用シャーレに入れ (図 3 中央, 右), 採集場所, 雌雄, 体長, およその齢を記録し写真撮影を行った. 種の保護のためクモは元の場所へ逃がし, 飼育用, 標本用のクモは最小限に止めた. なお, 調査に当たっては管理者の許可を得た.



図 1. 屋外での調査場所. 左, 石垣の隙間; 中央, 木造建造物の柱と板の隙間; 右, 大木の樹皮下.



図 2. 採集・観察用具. 左, ヘッドライト; 中央, クモを隙間から追い出すための用具 (竹串, 造花用番線径 0.4 mm) と採集用の筆とマヨネーズ容器, 採集物入れ; 右, 計測用シャーレ (5 mm 厚のり付パネルに 1 mm 方眼紙を貼り付け, シャーレに取り付けた).



図 3. 採集・観察方法. 左, 竹串 (矢印) で隙間からクモを追い出す; 中央, 右, 採集したクモを計測用シャーレに入れて記録する (中央の左, ♀成体; 中央の右, ♂成体; 右, 2 齢と思われる幼体).

3. 調査結果

(1) 生息確認地

本調査で, 京都市内全区 (中京区, 上京区, 下京区, 右京区, 左京区, 東山区, 西京区, 南区, 北区, 伏見区, 山科区) でヒトエグモの生息を確認した. 生息を確認した 51 の調査地を表 2 に示す.

表 2 の通り, 京都市右京区 6 社寺, 上京区 9 社寺, 北区 3 社, 左京区 4 社, 下京区 2 寺, 中京区 2 社寺, 西京区 2 社, 東山区 12 社寺・1 小学校, 伏見区 6 社寺, 南区 1 寺, 山科区 3 社寺の 51

の調査地でヒトエグモの生息を確認した。

(2) 発見場所

本調査では、管理者の許可を得て神社、寺院、旧家などの屋内調査も実施したが、発見例は東山区一橋小学校内だけであった。屋内ではヒトエグモの潜む場所が多くあり容易には発見できなかった。ただ、今宮神社、上御霊神社、金札宮の宮司や戒光寺住職の話では、屋内の物を移動した時にその下から這い出す本種をよく見かけるとのことであった。一方、屋外調査では、木造建造物の柱や板の隙間、石垣や灯籠、墓石、屋根瓦などの隙間、大木の樹皮下などで調査を行い、数多くの個体を発見した(図4)。ヒトエグモは屋外でも多く生息していることが確認された。

(3) 発見した個体

本調査では、成体の雌雄、幼体、2 齢幼体など成長段階の異なる個体を数多く発見した(図3 中央, 右; 図5)。

表 2. 京都市内でヒトエグモの生息を確認した調査地。

番号	初確認年月日	区名	調査地	番号	初確認年月日	区名	調査地
1	20050110	右京区	平野神社	27	20121113	西京区	松尾大社
2	20050204	右京区	二尊院	28	20121113	西京区	大原野神社
3	20070217	右京区	仁和寺	29	20041025	東山区	一橋小学校
4	20070217	右京区	春日神社	30	20041220	東山区	豊國神社
5	20120527	右京区	清涼寺	31	20041220	東山区	新日吉神社
6	20150224	右京区	松尾大社	32	20041228	東山区	東福寺
7	20041211	上京区	上御霊神社	33	20050115	東山区	満足稲荷神社
8	20041211	上京区	護王神社	34	20050115	東山区	知恩院
9	20041211	上京区	烏丸天満宮	35	20050115	東山区	安井金比羅宮
10	20050110	上京区	北野天満宮	36	20050115	東山区	若宮八幡宮
11	20050110	上京区	大將軍八神社	37	20050120	東山区	泉涌寺即成院
12	20050110	上京区	文子天満宮	38	20050120	東山区	今熊野観音寺
13	20050122	上京区	本法寺	39	20050128	東山区	泉涌寺戒光寺
14	20050122	上京区	妙顕寺	40	20050926	東山区	智積院
15	20050122	上京区	靈光殿天満宮	41	20120505	東山区	三十三間堂
16	20041226	北区	久我神社	42	20041024	伏見区	三栖神社
17	20041226	北区	建勲神社	43	20041030	伏見区	御香宮神社
18	20041226	北区	今宮神社	44	20041031	伏見区	伏見稲荷大社
19	20041228	左京区	吉田神社	45	20041204	伏見区	藤森神社
20	20041228	左京区	聖護院	46	20070311	伏見区	随心院
21	20041228	左京区	岡崎神社	47	20150811	伏見区	金札宮
22	20041228	左京区	八神社	48	20120423	南区	恋塚寺(恵光山淨禪寺)
23	20141115	下京区	宗仙寺	49	20041225	山科区	勧修寺
24	20141115	下京区	長香寺	50	20041225	山科区	山科神社
25	20050122	中京区	高松神明社	51	20061228	山科区	毘沙門堂
26	20050122	中京区	空也堂				

4. 考察

(1) 生息地

本調査で、本種は京都市内全 11 区に生息していることが確認された。生息を確認した神社や寺院の多くは京都盆地の平地部分である市街地に集中していた。左京区鞍馬寺、貴船神社、大原三千院など山間部の神社や寺院では発見できなかった。精査すれば発見の可能性は残されてはいるが、山間部の古い神社や寺院、旧家での生息調査や本種の生息環境については今後の課題である。京都市内には生息が期待される古い神社や寺院、旧家などが数多くある。今後も新しい生息地が発見されると思われる。

(2) 発見場所

本調査での本種の発見、採集はほとんどが屋外であった。本種が生活している場所は屋内だけではなく、屋外でも生活していることが確認された。発見した木造建造物や石造建造物の隙間はいずれも年代を経ており、新しい建造物の隙間での発見はなかった。また、潜んでいる空間は比

較的乾燥していた。潜んでいる隙間を厚さの異なる金属板で測定してみると成体で 1 mm から 2 mm, 幼体は 1 mm 以下であった。体の成長に合わせて体がぴたりとおさまる間隙を選んでいるようであった。なお、本種の生息環境や生活史の解明については現在研究を進めている。



図 4. ヒトエグモの発見場所。左, 基礎と土台の隙間で発見した成体; 中央, 石垣の隙間で発見した成体; 右, 石の下で発見した成体。



図 5. 採集したヒトエグモの液浸標本。

5. おわりに

本種は、京都府レッドデータブック 2015 では、絶滅危惧種に選定されており、府内の分布地域については京都市東山区, 左京区, 北区で採集されていると記載されている。本調査で、本種の生息を京都市内全 11 区で確認したが、筆者は、京都府長岡京市, 八幡市, 滋賀県大津市, 奈良県奈良市, 大阪府堺市でも確認している。本調査で本種を発見した古い神社や寺院, 旧家付近の屋外で、木造建造物や石造建造物の隙間を注意深く探していけば今後も各地で生息が確認されると期待している。現在、本調査で本種の生息を確認した調査地ではかなり多くの個体が生息しているが、今後、本種の保護については検討が必要である。

謝辞

本調査にあたっては、調査地の神社, 寺院, 旧家の皆様にご協力をいただきました。ここに感謝申し上げます。なお、本研究は、独立行政法人日本学術振興会より平成 16 年度科学研究費補助金 (奨励研究; 研究課題/領域番号 16918020) の助成を受け、「ヒトエグモの生息分布と生活史の解明」のテーマで行った研究の一部である。

参考文献

小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会.
京都府自然環境保全課 (編) 2015. 京都府レッドデータブック 2015 第 1 巻野生動物編.

滋賀県におけるヒトエグモ発見と新聞等を通じた市民からの情報収集

河瀬直幹

はじめに

ヒトエグモ *Plator nipponicus* (Kishida 1914) は、日本でただ 1 種のヒトエグモ科 (Trochanteriidae) に属する種で、“すべてのクモの中で最も扁平な体のクモ” (新海 2006) として知られる。吉田 (1999) は、日本における既存記録、既知の生息場所について整理し、分布や生態に謎が多い奇妙なクモとした。また、吉田 (2002) では既知の京都・大阪・奈良以外に、静岡県における分布記録が報告されたことを受けて、このクモが関西から東海にかけて広く分布しているのか？ いっそう謎が深まったと述べた。

筆者は水生昆虫が専門でクモ類に詳しくないが、職場 (甲賀市みなくち子どもの森自然館) で生物全般を広く担当する経緯から、滋賀県におけるヒトエグモ発見に立ち会うこととなった。本稿では、その発見の記録と、その後の県内における新聞等を通じた情報収集の結果について報告する。

2017 年 1 月 7 日、筆者の職場である自然館に市民から 1 本の電話があり、「(甲賀市) 水口町内で変わったクモを捕獲したので確かめてもらえるか？」とのことで、「クモの専門家に引き継ぐことはできます」と、応対を引き受けた。筆者はその時までヒトエグモについて知らなかったが、手元の「日本のクモ」(新海 2006) を参照して、事の重要性和ヒトエグモが古い人家と周辺部に限定して生息する変わった生態のクモと分かり、関心が高まった。自然館に持ち込まれた個体を見ると (その時に撮影した成体♂, 図 1), 予想より小さなクモであったが、異様に平たく、透明なチャック付ビニール袋の中を、窮屈そうでなく、ゆったりと移動していた。長く平たい各脚に、緑色がかった褐色の腹部は美しく感じられた。他に似たクモは図鑑になく、ヒトエグモと判断したが、滋賀県初記録であることから、滋賀県生きもの総合調査委員会「その他陸生無脊椎動物部」部会長の渡辺弘之氏を通じて、日本蜘蛛学会会員の吉田真氏が写真を確認した。すぐに、ヒトエグモの雄であると判明したが、同時に「このクモは採集された場所で調査しても 2 例目の記録がなかなか出せない、生態的に謎が多いクモ」(吉田 1999) と分かり、筆者は何とか滋賀県で 2 例目の記録を出したいと考えた。そこで、このクモは人家の中で発見される事例が大半である (吉田 1999) ことから、新聞等を通じて、滋賀県内の一般の市民に呼びかけて、生息情報を集めてみよう！と思いついた。

方法 (情報収集の手法)

筆者は職場の自然館で、イベント等の広報を担当しているため、甲賀市の広報課を通じて、2017 年 2 月 7 日付けで、新聞の各紙記者等へ「甲賀市の自然情報をお知らせします」と情報連絡 (取材案内) した。ヒトエグモの形態、分布や生態についての基本情報、滋賀県初記録であること、分布や生態に謎が多いこと、発見情報を寄せて欲しいこと、2 月 18 日に説明会を開催すること等を A4 用紙 1 枚に整理した。また、誤った情報が伝わらないよう、記者の人が原稿を書きやすいよう配慮した。

結果

(1) 広報による反響

各紙に情報連絡の後、相次いで各紙から取材があり (電話および直接応対)、2 月 8 日に朝日、京都、中日、毎日に掲載、2 月 12 日に読売に掲載され、新聞各社のインターネット版でも公開された。必ずしもこちらの意図通り、発見情報を寄せて欲しいと呼びかける内容に各紙の記事がなったわけではなかったが、多くの人に関心を持ってもらえたようだった。早速、2 月 10 日に 2 件の電話による確からしい情報が寄せられ、「どこかで見た気がする」という不確かな情報を含めて、館を訪れる多くの人からヒトエグモ記事を見たとの反響をいただいた。また、2 月 18 日の説明会には親子連れを含む、23 人が集まってくれ、「夏休みに祖父母の家でこのクモを発見するぞ！」と意気込む小学生もいた。

電話による2件の情報は確からしかったが、写真や標本といった証拠を伴わなかったため、これだけ広報しても、県内2例目の確実な情報は得られないのか…と思い始めた3月、相次いで2件の写真を伴う情報が得られた。

(2) 記録データ

今回の一連の調査で得られたヒトエグモの全ての記録と、同時に聞いた確認状況等を、情報が得られた日付順に以下に記述する。なお、目撃のみで標本や写真が得られなかった記録は、場所・時期の情報があり、観察された状況等から信憑性が高いと判断したものについて、《参考記録》として記録することとした。

(1) 甲賀市水口町京町, 2017年1月6日, 1♂採集(標本はみなくち子どもの森自然館に所蔵)(図1)。

水口町の旧東海道沿いの古い町並みにある民家で、書籍の隙間にいたところを採集された。生きた状態で1月7日にみなくち子どもの森自然館に持ち込まれた。採集者は、業務中に発見したため「匿名」を申し出られた。



図1. 甲賀市で採集された個体(♂)。

(2) 《参考記録》 甲賀市水口町虫生野, 2016年10月, 1個体目撃, 虫生野に在住の方による情報。

2月10日に電話連絡をいただいた。

虫生野の古くからの集落内の家で、「ベランダを這っている、とても平たい形のクモがいた。カニのように横歩きして気持ち悪かったのでよく覚えている。新聞に掲載されていた写真と全く同じだった」。

(3) 《参考記録》 近江八幡市新町, 2016年秋ごろが最新の記録, 複数回の目撃記録, 旧市街地の八幡商人の旧家が並ぶ付近の「加野道具店」奥様からの情報。

2月10日に電話連絡をいただいた。新聞の写真を見て「間違いない!」と連絡した。「年2~3回見かける。自宅の建て替えをしたが、旧家屋に隣接して新しくしたからか、新家屋でも和室付近に出現する。大掃除の時とか、和室の障子に止まっていたり、畳の隅にいたりする。いつも忘れた頃に、少しずつ違うところで見かけるので不思議な感じがしていた。春先にお日様の当たる窓際の壁や障子に止まっていた、日向ぼっこをしているかと思ったことがある。自分の実家の郊外の農家では見かけなかった。2年前ぐらいに、店の軒先の裏面に土で造られたハチの巣があり、掃除の際に剥がすと、壊れた巣の中から、このクモが何匹も出てきて驚いたことがあった(狩りバチに麻酔をかけられ産卵された状態?)」。(調査に行ってもよいか?と尋ねると)「どこにいるか分からないので、来てもらっても、発見できる可能性は低いのでは…」とのこと。

(4) 長浜市尊勝寺町, 2015年10月, 1♂, 称名寺の津布良春輝さん採集(図2)。

周囲を水田に囲まれた農村部のお寺の住居部分で、「廊下の隅を歩いていたところを捕獲した。紙みたいペタンコで、ゆっくりとしか動かないので変わったクモだと思っていた。今までに4,5回は見たことがあり、いずれも自宅のほこりっぽい場所とか、本の隙間で発見した。自宅は築約50年の木造建てで、大正期に再建された本堂と棟続きになっているが、本堂では



図2. 長浜市で採集された個体(♂)。

クモを見たことがない」。発見者の津布良さんは彦根東高校の国語教諭で、同僚の生物教諭が津布良さんから受け取った個体を 2015 年に撮影していた (図 2)。今回、水口で県内初記録の新聞記事を見て、以前に確認したクモだと気づき、中日新聞の記者に写真を送って確認依頼され、筆者の元へ情報が届いた。

(5) 大津市札の辻, 2017 年 3 月 17 日, 1 匹, 本長寺の清水良篤さん発見・撮影 (図 3)。

札の辻は古い町並みでお寺が集中して存在する地区。本長寺の境内で、「植木鉢を (複数個) 重ねて置いたものを外したところ, (内側に重なって入っていた) 植木鉢の外側にへばりついた個体を確認した (図 3)」。境内で作業中に発見して、筆者に電話をくださった様子で、電話越しに筆者から携帯カメラで撮影をお願いした。撮影された清水さんのお母様によると、「40 年前にはお寺の和室 (座敷) 付近に、掃除をする時などに幾つも出てきて困ったものだった。紙のように薄くて、潰れていると思ったら動き出して怖かった」とのこと。「今回、久しぶりに発見したので連絡した」。



図 3. 大津市で発見された個体 (♂)。

考察

以上のとおり、今回の調査において、滋賀県でヒトエグモの写真や標本を伴う確実な記録が 3 例と、信頼性が高い目撃情報が 2 例得られた。また、記録された県内の分布地も、甲賀市、近江八幡市、長浜市、大津市と県北部から南部にわたっており、断片的な情報であるが、滋賀県内にヒトエグモが広く分布している可能性が高いと考えられる。滋賀県には寺社仏閣の数が多く、県内を通過した東海道や中山道、北国街道などに接して古くからの街並みが多く残っていて、今後の分布調査が楽しみである。一方、現在まで滋賀県のヒトエグモの記録が得られなかった理由として、県内のクモ類を調査する人が少なかつたことも大きいと思われるが、今回のように一度に複数の情報が得られたことから考えると、人家付近でクモ類を調査する人が少なかつたことが大きいのでは？と感じる。当然のことであるが、クモ研究者がヒトエグモの住んでいそうな民家を見つけても、見ず知らずの人のお宅に「クモを調査させてください」と伺うことは無理がある。

また、ヒトエグモの生息環境としては、今回に得られた全ての情報が、お寺や古い街並みにある民家における記録であり、既知の情報と一致した。中でも、注目する必要があると思われるのは、今回の長浜市では、平野の水田に囲まれた農村部のお寺で記録されたことである。吉田 (1999) は、日本国内の近畿地方に偏った分布から、ヒトエグモが本来の分布地である韓国から (人為的に) 移入された可能性を指摘しているが、平野部の水田に囲まれた寺に確認された事例からも、人為的に荷物や資材と一緒に移動して、隙間の多い木造家屋等に定着した状況が想像できないだろうか。また、長浜市と近江八幡市の例は、古い家屋に隣接して新たに建てた住居に移動して、生息するようになった事例と考えられる。他に、大津市の寺の例では、40 年前は古い本堂の座敷によくいたが、改装して見られなくなったものの、最近に境内 (家屋外) で生存していた記録が得られた。今回の調査結果からは、こうしたヒトエグモの移動分散に関する事例も収集できたといえよう。

さらに、ヒトエグモが一度に確認される個体数としては、今回の調査でも全て単発的な記録であり、同じ場所で複数が連続的に観察される状況ではなかった。しかし、近江八幡市では年に 2~3 回、長浜市では今までに 4~5 回、大津市では 40 年前にはよく見られて今年に久しぶりに記録された等の情報があり、同じ場所に継続して生息するのは間違いなさそうである。また、近江八幡市では、狩りバチと思われる泥の巣から、複数のヒトエグモが出てきたと証言があり、狩りバチには複数のヒトエグモを効率的に発見する能力があると考えられる。それならば、人に見つ

かり難いだけで、必ずしも個体密度が低いわけではないのかも知れない（ちなみに、泥で建造物の天井側に巣を造るのはアメリカジガバチかキゴシジガバチ？ もしくは、ヒメクモバチ類なら、脚が切断されてクモの様子が違って見える？）。

最後に、今回の調査の特徴として、新聞等に掲載されることで、市民から広く情報を集めたことがある。古い人家や寺の屋内・庭などで発見される事例が多いヒトエグモの分布調査を広域に実施するには、今後も家屋の住人の情報協力が不可欠であろう。当初、一般的な市民の人がヒトエグモを判別できるか不安もあったが、自然館に最初にヒトエグモが持参された状況からも、非常に扁平な体型と、不思議に感じる緩慢な横歩きの動作は、少し生物に関心がある人ならば、このクモと判別できるだろう、と感じた。また、最近では新海（2006）など多数の生態写真が掲載された図鑑があり、多くの人が携帯するスマホでも、ヒトエグモかどうかを、すぐ画像検索・確認できる時代となった。こうした社会的な情報整備によって、今回の滋賀県におけるヒトエグモの情報収集が可能となった側面も指摘できる。

謝辞

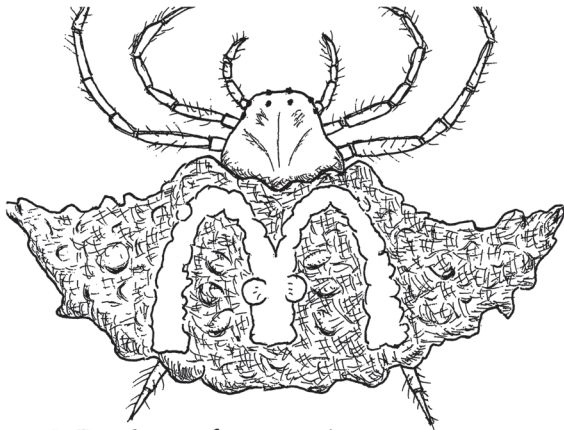
日本蜘蛛学会会員の吉田真氏には、文献の紹介やヒトエグモについてのさまざまな知見を紹介して頂いた。また、この調査は多くの方々の情報連絡によって成立したもので、情報の伝達に関わった以下の方々や機関に特に感謝申し上げたい。甲賀市の辻佳祐氏他の情報をくださった皆様、近江八幡市の加野道具店の皆様、長浜市称名寺の津布良春輝氏と彦根東高校の生物の先生、大津市本長寺の清水良篤氏とお母様、甲賀市市政クラブに所属する各紙（朝日新聞、京都新聞、中日新聞、毎日新聞、読売新聞＜以上、あいうえお順＞）の記者の方々、長浜市の情報を仲介いただいた中日新聞彦根支局の渡辺大地記者、甲賀市広報課、みなくち子どもの森自然館、滋賀県生きもの総合調査委員会専門部会「その他陸上無脊椎動物」部会長の渡辺弘之氏、その他調査にご協力いただいた皆様に御礼いたします。

引用文献

- 新海栄一 2006. ネイチャーガイド 日本のかぐも. 文一総合出版, 東京, 335 pp.
 吉田真 1999. ヒトエグモ (*Plator nipponicus*) についての覚え書き. くものいと, 26: 17-22.
 吉田真 2002. ヒトエグモの分布記録. くものいと, 32: 38.

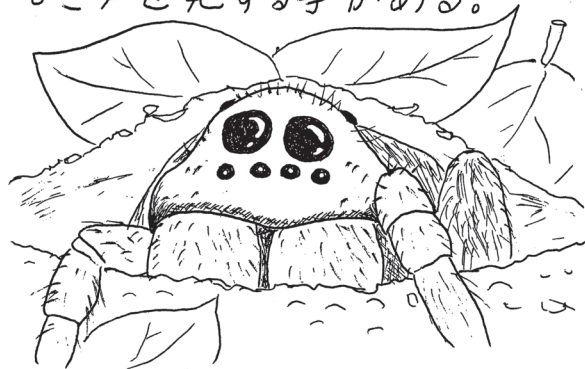
妄想蜘蛛図鑑

Pen name KZ00



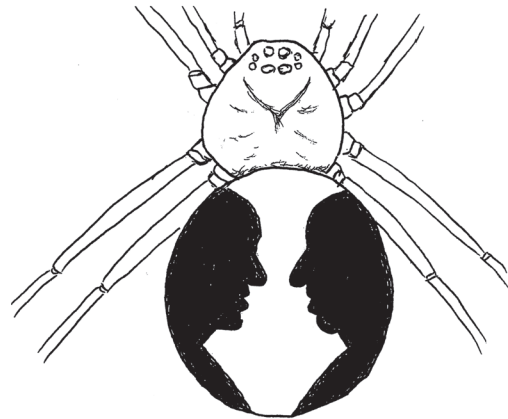
マクドツキジグモ

腹部赤色に黄色の模様が特徴。捕食者が近づくと、「お召し上がりですか？」採集者が近づくと「お持ち帰りですか？」とのなき声を発する事がある。



ヒキコモリグモ

地中に穴を掘る親グモの子守り延長型。危険が少ないので生存率が高く、成体になっても親グモと同居し、給餌を受ける。夜行性。争いを好まないで繁殖相手とも同居でき、子育てをする。



サイコホラーヒメグモ

洞窟の深部に生息し、腹部の模様が人間の横顔に見えるため、採集者は異様な精神的負担を感じる。野外に出たからは理由なくコウモリの大群に攻撃を受け続ける。



トリフンダマシダマシ

まこと、鳥のフン。ミリの確率でオトリか？カウツケオか？と確認しないと気が済まない採集者はぬかるみに足をとられ、くぼ地に落ち込み、水路にはまったりする。

関西クモ研究会採集会の記録 (2016 年度)

2016 年度の採集会は伊丹市の昆陽池公園において、伊丹市昆虫館との共催で、一般市民の参加を募って実施した。実施日時は次のとおり。

- ・第 1 回目：2016 年 5 月 22 日 (日) 10:00~15:00
- ・第 2 回目：2016 年 8 月 6 日 (土) 18:00~21:00 (夜間採集)
- ・第 3 回目：2016 年 10 月 2 日 (日) 10:00~15:00

参加者

- ・5 月 22 日：赤松史憲，荒川真，伊規須貞子，奥山清市，加村隆英，清水裕行，関根幹夫，高見咲恵，田中穂積，西川喜朗，福田孝男，船曳和代，山田廣士，吉田真。
- ・8 月 6 日：赤松史憲，荒川真，奥山清市，片山元気，加村隆英，清水裕行，関根幹夫，高見咲恵，田中穂積，福田孝男，前川侑子，増田圭祐。
- ・10 月 2 日：赤松史憲，赤松麻衣，赤松由明佳，赤松莉依子，稲畑憲昭，奥山清市，加村隆英，岸本正也，清水裕行，関根幹夫，高見咲恵，田中穂積，西川喜朗，西本裕，船曳和代，道盛正樹。

確認されたクモは以下のとおり。数字は日付。括弧内は同定及び報告者。現地で目撃して確認したものは「確認」と記してある。科の分類と配列は、一部を除いて小野 (2009) に準じた。

ユウレイグモ科

イエユウレイグモ 8/6 確認。

ガケジグモ科

クロガケジグモ 5/22:♂(加村);10/2 確認。

ハグモ科

ネコハグモ 8/6 確認;10/2:♂(加村)。

ウズグモ科

マネキグモ 8/6 確認。

カタハリウズグモ 5/22:♀(加村);8/6 確認。

タナグモ科

クサグモ 5/22:幼体(加村),幼体(吉田)。

コクサグモ 5/22:幼体(吉田);8/6 確認;
10/2:♀(稲畑)。

キシダグモ科

イオウイロハシリグモ 5/22:幼体(荒川);
8/6 確認;10/2 確認。

コモリグモ科

ハラクロコモリグモ 5/22:幼体(加村);
10/2:♂+♀亜成体(田中),♀(西川)。

カイゾクコモリグモ属の一種 10/2:幼体(西川)。

ササグモ科

ササグモ 5/22:♂幼体(荒川)。

サラグモ科

ムネグロサラグモ 5/22:♀(加村),♀(荒川)。

スソグロサラグモ 5/22:♀(吉田)。

ヒメグモ科

アシプトヒメグモ 5/22:♀(山田)。

シロカネイソウロウグモ 5/22:幼体(荒川);
10/2:♀(稲畑)。

チリイソウロウグモ 5/22:♂幼体(加村),
幼体(吉田);8/6 確認;10/2:♀幼体(稲畑)。

オナガグモ 5/22:幼体(吉田);8/6 確認;
10/2 確認。

オダカグモ 8/6 確認。

シモフリミジグモ 5/22:♂+幼体(吉田)。

セアカゴケグモ 10/2:♀+♂+幼体(加村)。

フタオイソウロウグモ 5/22:♀+幼体(吉田);
10/2:♂幼体(加村)。

カグヤヒメグモ 5/22:♀+♂(加村)♀(荒川);
8/6 確認;10/2:♀(関根)。

ニホンヒメグモ 5/22:幼体(吉田);8/6 確認。

ミナミホシヒメグモ 5/22:♀(吉田)。

ムナボシヒメグモ 5/22:♀+♂(加村),♀(吉田)。

ヤリグモ 8/6 確認。

ハンゲツオスナキグモ 10/2:♀(西川)。

バラギヒメグモ 5/22:♀(吉田)。

ムネグロヒメグモ 5/22:♂(吉田)。

アシナガグモ科

チュウガタシロカネグモ 5/22:♀(加村),
♂幼体(荒川);8/6 確認;10/2 確認。

コシロカネグモ 5/22:♀(加村),♀+♂(吉田);
8/6:♀(加村)。

ヤサガタアシナガグモ 5/22:♀(吉田)。

アシナガグモ 5/22:♂(荒川),♀(吉田);

8/6 確認.

ウロコアシナグモ 5/22: ♂ (加村), ♂ (荒川), ♂, 幼体 (吉田), 幼体 (関根); 8/6 確認.

ジョロウグモ科

ジョロウグモ 5/22: 幼体 (加村), 幼体 (吉田), 幼体 (関根); 8/6 確認; 10/2: ♂+♂ 幼体 (稲畑).

コガネグモ科

ハツリグモ 5/22: ♀ (加村); 10/2 確認.

ビジョオニグモ 10/2 確認.

アオオニグモ 5/22: ♀ (荒川); 10/2: ♀ (稲畑).

オニグモ 5/22: ♂ 幼体 (吉田).

コガネグモ 8/6 確認; 10/2: 卵囊, 子グモ確認.

コガタコガネグモ 5/22: ♀ (関根); 8/6 確認; 10/2: ♀ (加村).

ギンメッキゴミグモ 5/22: ♀ (加村); 10/2: ♀ (加村).

ギンナガゴミグモ 5/22: ♀ (加村), ♀ (関根).

ゴミグモ 5/22: ♂ (荒川), ♀ (吉田); 8/6 確認; 10/2 確認.

シマゴミグモ 5/22: ♀ (関根).

キヌアミグモ 5/22: ♀+♂ (加村), ♀ 幼体 +♂ 幼体 (吉田); 8/6: ♀+卵囊+まどい確認; 10/2: 子グモ確認.

コゲチャオニグモ 8/6: ♀+♂ (加村).

ヤマシロオニグモ 5/22: 幼体 (荒川), ♂ 幼体+幼体 (吉田).

サツマノミダマシ 8/6 確認.

ツチフクログモ科

イタチグモ 5/22: 幼体 (加村); 10/2 確認.

コマチグモ科

ヤマトコマチグモ 5/22: ♀+♂ (吉田), ♂ (加村).

エビグモ科

キハダエビグモ 5/22: ♂ (荒川); 10/2 確認.

アサヒエビグモ 5/22: ♂ (加村), ♂+♀+幼体 (吉田), ♂ (関根).

ワシグモ科

ムナキワシグモ 5/22: ♂ (高見), ♀ (清水), ♀ (西川).

カニグモ科

キハダカニグモ 5/22: ♂ (荒川), ♀ (吉田); 10/2: ♂ 幼体 (稲畑).

ハナグモ 5/22: ♀ (山田).

オチバカニグモ属の一種 10/2: 幼体 (西川).

アズチグモ 5/22: 幼体 (吉田); 8/6 確認.

ヤミイロカニグモ 5/22: ♀ (加村), ♀ (吉田).

フクログモ科

コフクログモ 5/22: ♀ (吉田).

ネコグモ科

ネコグモ 5/22: ♀ (吉田).

ウラシマグモ科

オトヒメグモ 10/2: ♀+♂ (西川).

ハエトリグモ科

マミジロハエトリ 10/2 確認.

ヨダンハエトリ 5/22: ♀ (荒川), ♂ 幼体 (吉田); 10/2 確認.

アリグモ 5/22: ♀+♂ (加村), ♀+♂ (荒川), ♀+♂+幼体 (吉田), ♂ (関根); 10/2: ♀ (関根).

チャスジハエトリ 5/22: 幼体 (荒川).

アオオビハエトリ 5/22: ♂ (加村), ♂ (吉田); 10/2 確認.

文献

小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会.

(文責: 加村隆英)

関西クモ研究会 2016 年度例会の記録

2016 年 12 月 18 日 (日) に 大阪市立自然史博物館で 2016 年度の例会が開催された。

役員会

例会に先立って、役員会が開かれた。出席者：田中穂積（会長）、加村隆英（編集）、西川喜朗・船曳和代（顧問）、関根幹夫（会計監査）。

以下の事項が審議、報告された。

(1) 会費納入状況について。2010 年度までしか会費を納めていない会員については、退会と扱うことが提案され、審議の結果、了承された。

(2) 「くものいと」の編集状況

2016 年 3 月に第 49 号を発行した。第 50 号を 2016 年 3 月に発行する予定。

(3) 2017 年度の行事予定

- ・ 観察採集会：2017 年 5 月 28 日 (日)、10 月 1 日 (日)、いずれも場所は、近畿大学奈良キャンパス。
- ・ 例会：2017 年 12 月 17 日 (日) に大阪市立自然史博物館で開催。

例会

出席者：赤松史憲、荒川 真、伊藤 博、加村隆英、岸本正也、坂井 誠、清水裕行、関根幹夫、田中穂積、谷川明男、西川喜朗、西本 裕、船曳和代、松本吏樹郎、村上協三（計 15 名）。

講演発表

- (1) 関根幹夫：横浜のホンチ
- (2) 谷川明男：佐渡島クモ類調査
- (3) 松本吏樹郎：カニミジグモに寄生する 2 種のクモヒメバチ
- (4) 西川喜朗：セアカゴケグモによる咬傷例
- (5) 船曳和代：ヒカリアシナガグモの卵のう
- (6) 清水裕行：セアカゴケグモの分布拡大状況について
- (7) 村上協三：淀川沿いに生息するゼブラハエトリについて

なお、講演の合間に、役員会で審議、報告した内容を出席者に紹介し、了承を得た。また、出席者全員が近況を報告した。

付記。この日の役員会において、2017・2018 年度の新役員案を決めて、出席者の承認を得るべきところ、手違いにより、それを行いませんでした。そのため、後日、現役員で検討し、役員は全員、2015・2016 年度のまま継続することを決定しました。会員各位におかれましては、どうぞご了承ください。

関西クモ研究会 2015 年度会計報告

収入：	2014 年度からの繰越金	373,108
	会費 2015 年度前受け分繰り入れ	48,000
	会費 2015 年度分入金	17,000
	会費過年度分入金	16,000
	受取利子	112

合計		454,220
----	--	---------

支出：	くものいと No. 49	表紙用紙		1,080
	くものいと No. 49	発送用封筒		1,027
	くものいと No. 49	印刷費		2,000
	くものいと No. 49	郵送費		11,620
	ホッチキス針			129
	領収書送付 (会計幹事宛)			82
	採集会・例会等の案内 郵送費			12,750
	採集会・例会等の案内 ラベル郵送費			1,230
	2016 年度への繰り越し			424,302

合計		454,220
----	--	---------

会費前受け状況

2015 年度末における会費前受け分の合計は、79,000 円である。
 その内訳は次のとおり。2016 年度分 43,000 円；2017 年度分 19,000 円；2018 年度分 8,000 円；2019 年度分 6,000 円；2020 年度分 2,000 円；2021 年度分 1,000 円。

上記のとおり、報告します。

会計幹事 吉田 真

2015 年度会計監査報告

関西クモ研究会 2015 年度会計について、関係諸票書類に基づき監査を行った結果、適正に処理されていることを確認いたしました。

2016 年 4 月 12 日 会計監査 関根幹夫